河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

１９８９年３月

河内長野市教育委員会

序　文

河内長野市はここ数年、高層階の集合住宅をはじめとする住宅の建設ラッシュの様相を呈している。これを反映してか、先に大阪府から発表された、昭和63年10月１日現在の府内市町村の推計人口によると、河内長野市は前年比4,951人増で府下最高という。

地域開発の推進と埋蔵文化財の保護は表裏一体であり、古くて新しい問題である。各種の土木工事は土の下に眠る埋蔵文化財をゆりおこし破壊する危険を孕むものといわれて久しい。この意味で地域の有意義な開発は、埋蔵文化財の保護を十分に勘案したうえで行われなければならないであろう。

それは、地域開発によって移り住む人々にとって、埋蔵文化財がとりもなおさずその地の歴史の証人であるからである。

本書は、昭和63年度に本市内で実施した土木工事に伴う緊急発掘調査の成果を収録したものである。

これらの調査を実施し得たのは、ひとえに施主の方々の埋蔵文化財保護に関する深い理解によるものである。末尾ながら謝意を表するものである。

平成元年３月

河内長野市教育委員会
教育長　中　尾　謙　二

目　次

例　言…… 1
はじめに…… 2

加塩遺跡

1．位置と環境…… 5
2．調査に至る経過…… 5
3．遺構と遺物…… 5
4．まとめ……13

長池窯跡群

1．位置と環境……14
2．調査に至る経過……14
3．遺構と遺物……14
4．まとめ……21

挿図目次

第1図　河内長野市遺跡分布図…… 3

加塩遺跡

第2図　加塩遺跡遺構全体図…… 6
第3図　竪穴住居遺構実測図…… 7
第4図　竪穴住居出土遺物実測図…… 8
第5図　掘立柱建物Ⅰ遺構実測図…… 9
第6図　掘立柱建物Ⅰ出土遺物実測図…… 9
第7図　掘立柱建物Ⅱ遺構実測図……10
第8図　掘立柱建物Ⅱ出土遺物実測図……10
第9図　掘立柱建物Ⅲ遺構実測図……11

第10図　土壙遺構実測図……11
第11図　土壙出土遺物実測図……11
第12図　棚列遺構実測図……12
第13図　ピット出土遺物実測図……12

長池窯跡群

第14図　長池窯跡群遺構全体図……15
第15図　溝１、２、溝３遺構実測図……16
第16図　土壙１、土壙２遺構実測図……16
第17図　土壙１、土壙２出土遺物実測図……17
第18図　周溝状遺構実測図……18
第19図　周溝状遺構出土遺物実測図……19
第20図　窯状遺構実測図……20

表目次

第１表　河内長野市遺跡地名表……4
第２表　加塩遺跡出土遺物観察表……22
第３表　長池窯跡群出土遺物実測図……23

図版目次

加塩遺跡

図版１　遺構　遺跡全景(東から)、掘立柱建物Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ全景(西から)
図版２　遺構　掘立柱建物Ⅱ、Ⅲ、土壙、
竪穴住居全景(東から)、竪穴住居全景(南から)
図版３　遺構　竪穴住居　竈状遺構、竈内遺物出土状況
図版４　遺構　住居内土器出土状況、土壙全景(南から)

図版５　遺構　柱穴内遺物出土状況、Ｐ３遺物出土状況
図版６　遺物　竪穴住居(１～11)
図版７　遺物　掘立柱建物Ⅰ(12、13)、掘立柱建物Ⅱ(14～18)、
土壙(19～21)、Ｐ１(23)、Ｐ３(22)

長池窯跡群

図版８　遺構　調査前全景、作業風景
図版９　遺構　遺跡全景(南から)、遺跡全景(北から)
図版10　遺構　溝１、２全景(北から)、溝３(南から)
図版11　遺構　溝３(西から)、周溝状遺構全景(北から)
図版12　遺構　周溝状遺構土器出土状況、土壙１全景(北から)
図版13　遺構　土壙２全景(東から)、窯状遺構全景(東から)
図版14　遺物　土壙１(25)、土壙２(26)、周溝状遺構(27～29)
図版15　遺物　周溝状遺構(30～32)

例　言

1．本書は昭和63年度に河内長野市教育委員会が国庫補助事業として計画、実施した塩谷遺跡ほか市内遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、本市教育委員会社会教育課文化係尾谷雅彦を担当者として、昭和63年４月１日から着手し平成元年３月31日をもって終了した。

3．本書の執筆は遺構が尾谷雅彦、遺物を高田加容子・中村清美が行った。

4．編集は尾谷が担当し、本書の文責は尾谷が負うものである。

5．発掘調査及び内業整理については下記の方々の協力を得た。

明地奈緒美・杉本祐子・鈴木雅子・古池陽子・田中美知代・甚口浩美・小谷洋子・中田文・阪本桂子・金田佳子・平井令子・中野雅美・久保八重子中西和子・喜多順子・乾利夫・福田昌弘

6．調査の実施に関しては下記の方々の協力を得た。

奥田耕己・佐々木裕一・南口昇一・奥開宏・土井畑尚・有国正博・南裕之・学校法人千代田学園（理事長　吉田博司・総務部長　竹内俊雄）・三和設計・大末組・中央建設・島田組

はじめに

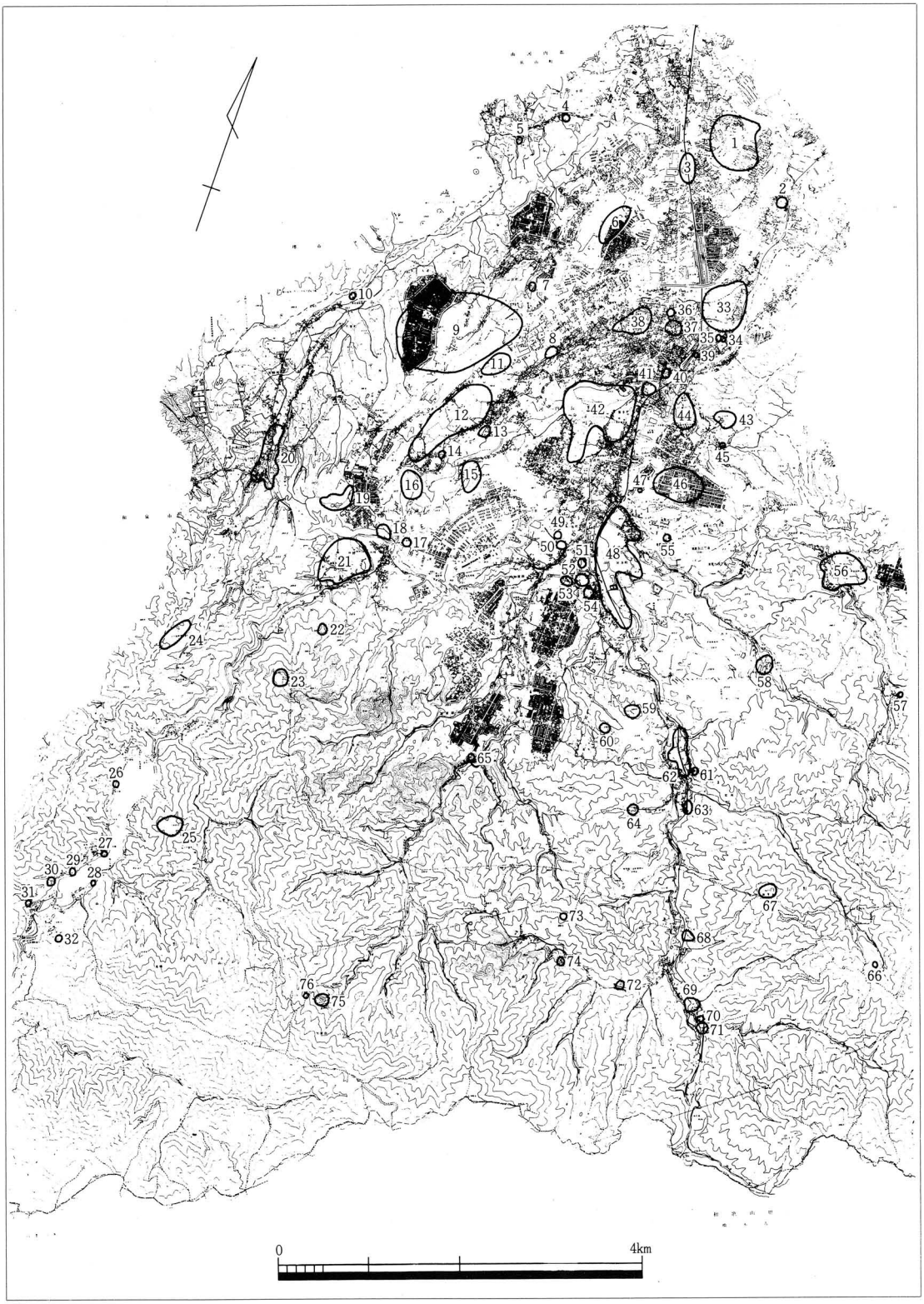
大阪府の東南端に位置する河内長野市は、旧河内国錦部群に属し、紀伊・大和・和泉の三国に接していた。この為、古代から交通の要所となったところである。現代の河内長野市は大阪市の通勤圏に位置し、住宅都市として年々人口の増加する町である。この為、住宅開発とあわせて交通アクセスの整備、住宅環境の整備など、公共投資も盛んである。この結果、地下に眠る埋蔵文化財への影響は増加するばかりである。

このような状況のなかで本市教育委員会は本年度から国庫及び府からの補助金を受けて発掘調査を実施してゆくことになった。

本年度の公共事業に対する埋蔵文化財の対応を除き、民間開発に伴う調査は以下の通りである。

発掘調査

遺跡名	調査期間	申請者	面積	区　分	備　　考
加　　塩	63.4/10～5/26	奥田　耕己	560㎡	病院建設	本書掲載
長池窯跡群	63.6/10～7/2	吉田　博司	1,300	学校用地	本書掲載
三　日　市	63.8/3	南口　昇一	8	個人住宅	遺構・遺物なし
三　日　市	63.8/3	南口　光男	8	個人住宅	遺構・遺物なし
本多藩陣屋	63.8/12	奥開　　宏	8	個人住宅	遺構・遺物なし
尾　　崎	63.11/25	土井畑　尚	8	個人住宅	遺構・遺物なし
塩　　谷	63.12/14	有国　正博	8	個人住宅	遺構・遺物なし
塩　　谷	元年.1/22	南　　裕之	10	個人住宅	遺構・遺物なし



第１図　河内長野市遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	塩谷遺跡	弥生時代～中世	40	長野神社遺跡	中世
2	千代田神社遺跡	中世	41	大日寺遺跡	
3	菱子尻遺跡	弥生時代～中世	42	鳥帽子形古墳	古墳時代
4	小山田1号古墓	奈良時代		鳥帽子形城跡	中世
5	小山田2号古墓	奈良時代		鳥帽子形八幡宮	中世
6	寺が池遺跡	旧石器時代～縄文時代	43	河合寺	中世
7	住吉元宮遺跡	中世	44	河合寺城跡	中世
8	上原北遺跡			末広窯跡	中世
9	長池窯跡群	中世	45	福田家	近世
10	青垣神社遺跡	中世	46	大師山遺跡	古墳時代前期～弥生時代中期
11	塚穴古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	47	大師山南古墳	古墳時代
12	高向遺跡・高向南遺跡	弥生時代～中世	48	三日市遺跡・石仏遺跡	旧石器時代～近世
13	惣持寺跡	中世	49	小塩遺跡	
14	高向神社遺跡	中世	50	加塩遺跡	
15	宮山古墳	古墳時代後期	51	尾崎遺跡北	
16	高木遺跡	旧石器時代～縄文時代	52	尾崎遺跡南	
17	峰山城跡	中世	53	加賀田神社遺跡	
18	日の谷城跡	中世	54	ジョウノマエ遺跡	
19	仁王山城跡	中世	55	栗山遺跡	
20	金剛寺		56	観心寺	平安時代～
21	日野観音寺遺跡	中世	57	川上神社遺跡	中世
22	稲荷山城跡	中世	58	延命寺	
23	旗蔵城跡	中世	59	石仏城跡	中世
24	国見城跡	中世	60	左近城跡	中世
25	権現城跡	中世	61	薬師寺	
26	清水阿弥陀堂跡	近世	62	清水遺跡	中世
27	滝畑埋墓	近世	63	千早口駅南遺跡	中世
28	中村阿弥陀堂跡	近世	64	地蔵寺	
29	堂村地蔵堂跡	近世	65	大江家	
30	天神社遺跡	中世	66	葛城第18経塚	
31	西の村阿弥陀堂跡	近世	67	旗尾城跡	中世
32	東の村観音堂跡	近世	68	天見駅北方遺跡	中世
33	向野遺跡		69	蟹井淵北遺跡	中世
34	双子塚古墳伝承地		70	蟹井淵神社遺跡	中世
35	五の木古墳跡	古墳時代後期	71	蟹井淵南遺跡	中世
36	古野町遺跡	中世	72	流谷八幡神社遺跡	中世
37	膳所藩陣屋跡	近世	73	葛城第17経塚	
38	西代神社遺跡		74	薬師堂跡	
	本多藩陣屋跡	近世	75	岩湧寺	
39	法師塚古墳伝承地		76	葛城第15経塚	

第1表　河内長野市遺跡地名表

加塩遺跡

1．位置と環境

当該遺跡は河内長野市加賀田3369番地他に所在する遺跡である。

遺跡は金剛・葛城山系から北に派生する丘陵の東裾部、石川の支流加賀田川を望む、標高120ｍの河岸段丘の東端に位置する。

当遺跡の周辺の遺跡としては、北側に近接して７世紀頃の須恵器が散布する小塩遺跡があり、加賀田川を挟んで東側１kmには古墳時代６世紀頃から中世の遺構・遺跡が検出された尾崎遺跡及び中世の遺構・遺跡が検出されたジョウノマエ遺跡が位置している。また、尾崎遺跡の南側の屋根上端には中世の遺構・遺跡が検出された加賀田神社遺跡が位置している。

また、丘陵の西側斜面には宮山古墳が位置している。

2．調査に至る経過

当遺跡は当該地に開発の計画があり、原因者の届出により昭和63年４月１日の試掘調査を実施した結果、新たに発見されたものである。遺跡名は地名から加塩遺跡とした。遺跡の範囲は3,000㎡以上と考えられる。

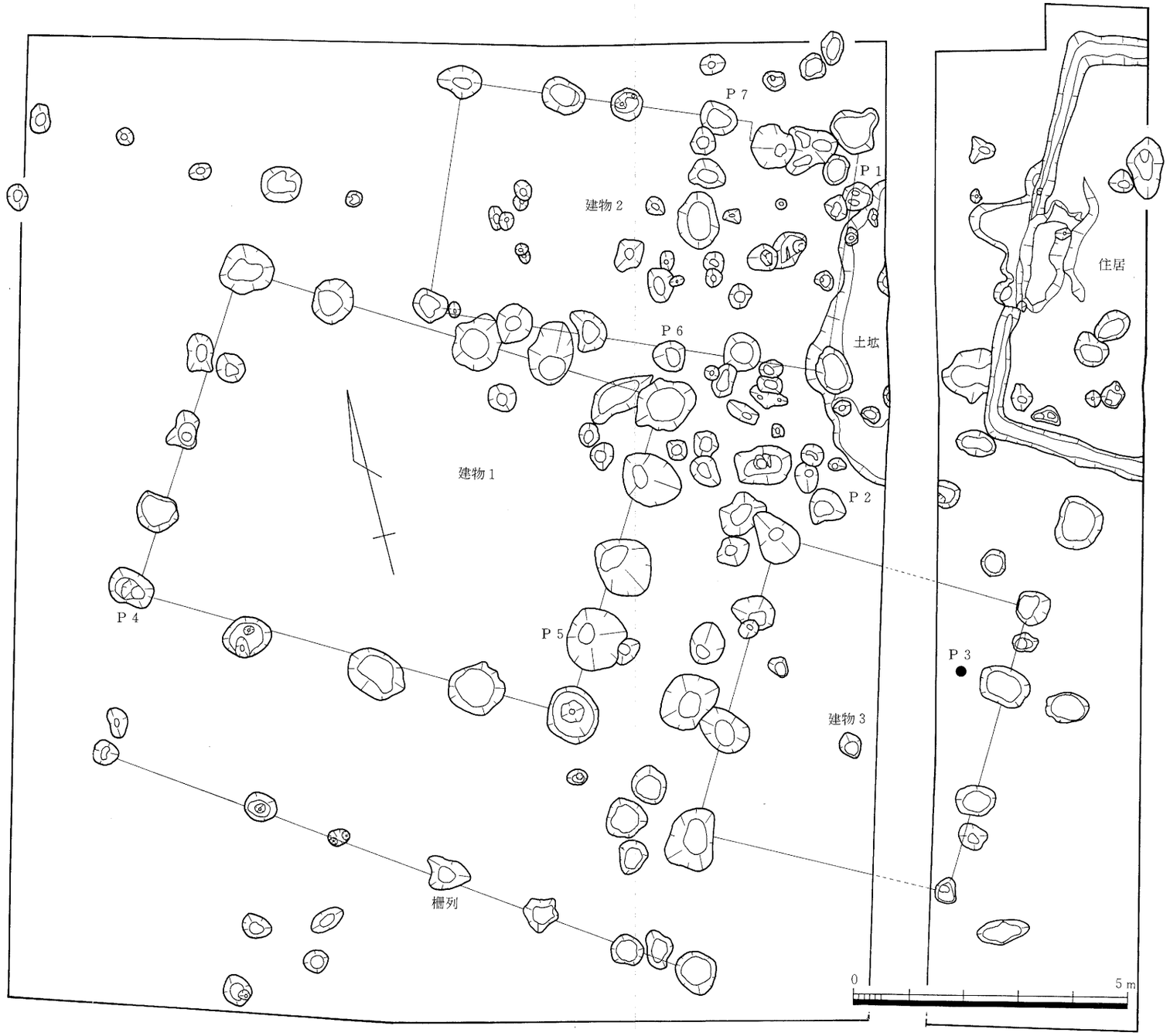
遺跡の発見後、原因者と協議した結果、調査対象は建物部分560㎡について実施し、他分は盛土により保存されることとなった。

調査について、昭和63年４月９日に覚書を締結し、昭和63年４月11日から４月26日まで調査を実施した。また、この遺跡の北側でも須恵器の散布が密にみられ、新規発見の遺跡の小塩遺跡として登録した。

3．遺構と遺跡

遺構検出面は現地表から浅く、耕土・床土を除去すると遺構が現われた。東側の深度の深いところでも、上層から耕土（20cm）・床土（５cm）・極暗褐色礫まじり粘土（土器、炭、灰、焼土が交る。20cm）と成り、－40cmで遺構面となる。

遺構

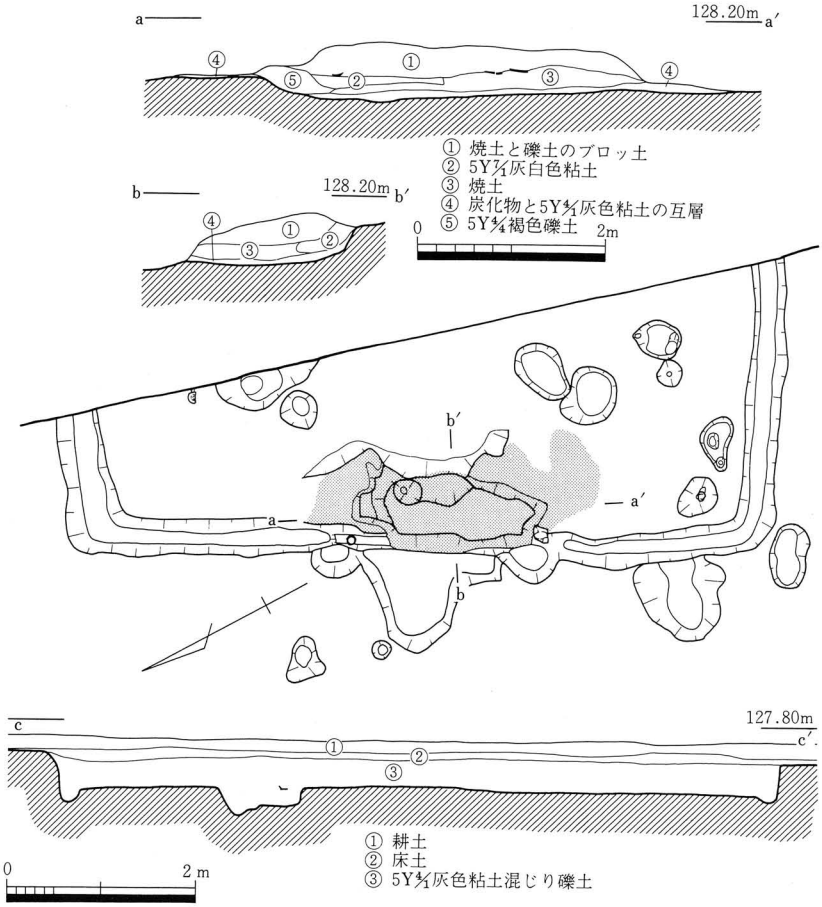


第 2 図　加塩遺跡遺構全体図

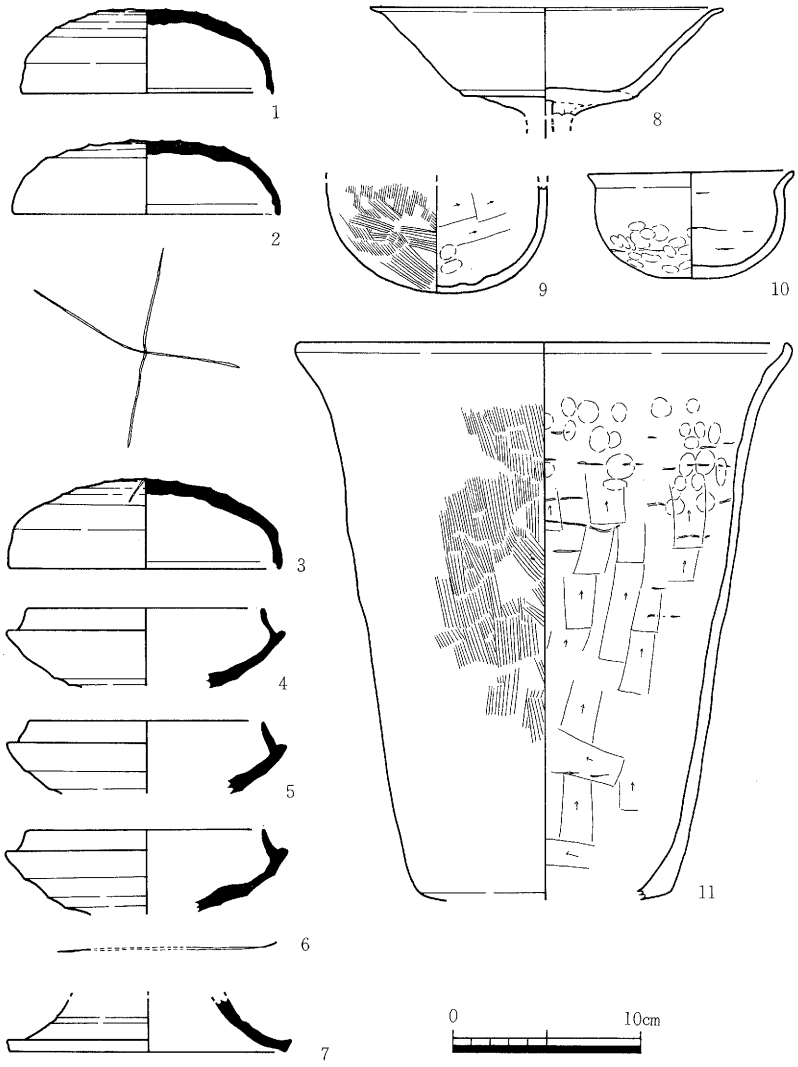
検出された遺構は掘立柱建物３棟、竪穴住居１棟、土壙１、柱穴状のピットが多数であった。

＜竪穴住居＞　掘立柱建物Ⅱの北東側３ｍに位置する。平面形が方形のカマドを持つ住居である。全容は判明しなかったが検出された一辺が７ｍで、主軸方向はＮ－60°－Ｗを示す。壁高は残存高30cmで、壁に沿って幅30cm、深さ10cmの壁溝が巡り、土師器の鉢がカマドの北側から出土している。住居内から８個の柱穴が検出されたが主柱穴を断定することは出来なかった。カマドは北西の壁中央に長幅1.8ｍ、幅0.8ｍで検出されたが詳細は不明である。

遺物は、住居内埋土から須恵器杯身(4･5･6)、杯蓋(1･2･3)、高杯(７)、土師器高杯(８)、甕(９)が出土し、カマド内から甑(11)が出土している。また、壁溝内から鉢(10)が出土している。



第３図　竪穴住居遺構実測図

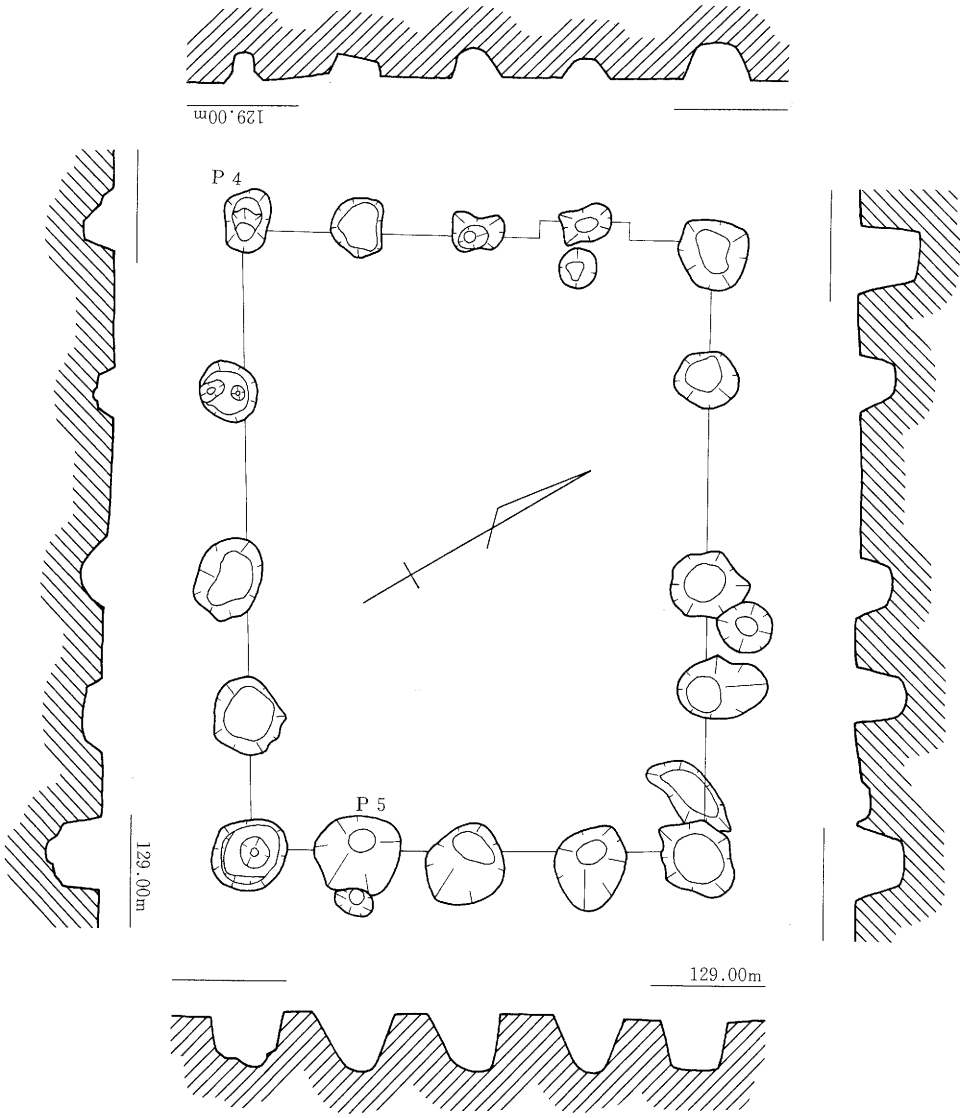


第４図　竪穴式住居出土遺物実測図

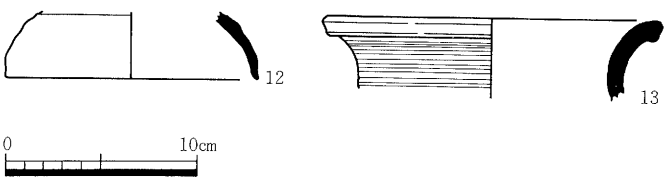
＜掘立柱建物Ⅰ＞　調査区中央で検出された今回の調査で最大規模の建物で桁行４間（８ｍ）×梁行４間（６ｍ）で、主軸方向Ｎ－60°－Ｗ。柱間は桁行が２ｍから2.5ｍ、梁行が1.5ｍから1.7ｍである。柱穴は径0.6～１ｍ、深さ0.5～１ｍ、埋土から須恵器・土師器片が出土している。

遺物は須恵器がＰ４から杯蓋(12)とＰ５から壺(13)が出土している。

＜掘立柱建物Ⅱ＞　掘立柱建物Ⅰの東側2.5ｍに位置する。桁行４間（5.5ｍ）×梁行１間？(0.8ｍ)、主軸方向Ｎ－60°－Ｗ。柱穴は径0.4～１ｍ、深さ0.5～１ｍ、埋土から須恵器・土師器片が出土している。

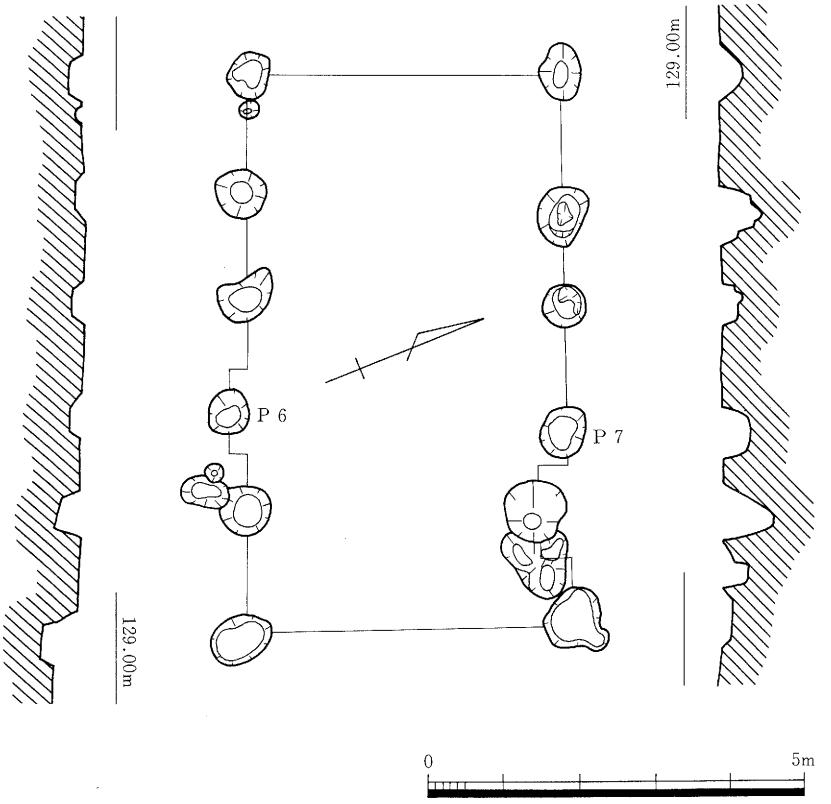


第５図　掘立柱建物Ⅰ　遺構実測図

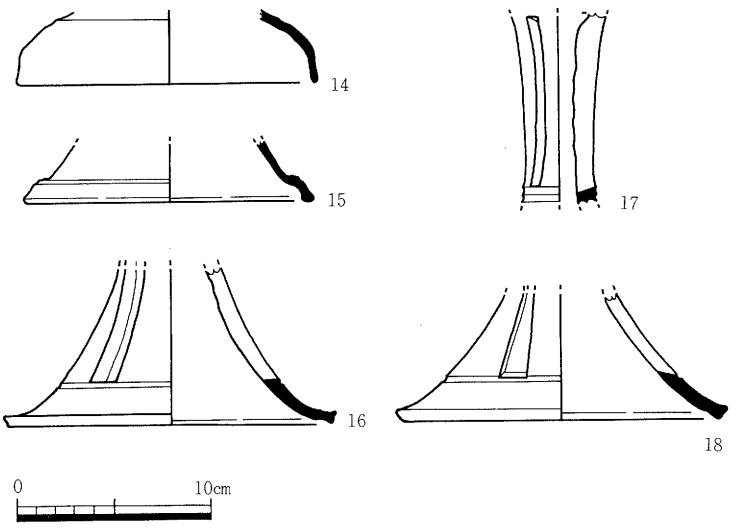


第６図　掘立柱建物Ⅰ　出土遺物実測図

遺物は柱穴から須恵器が出土しており、Ｐ６から杯蓋(14)、脚付壺脚部(15)、高杯(16)、Ｐ７から高杯(17・18)が出土している。



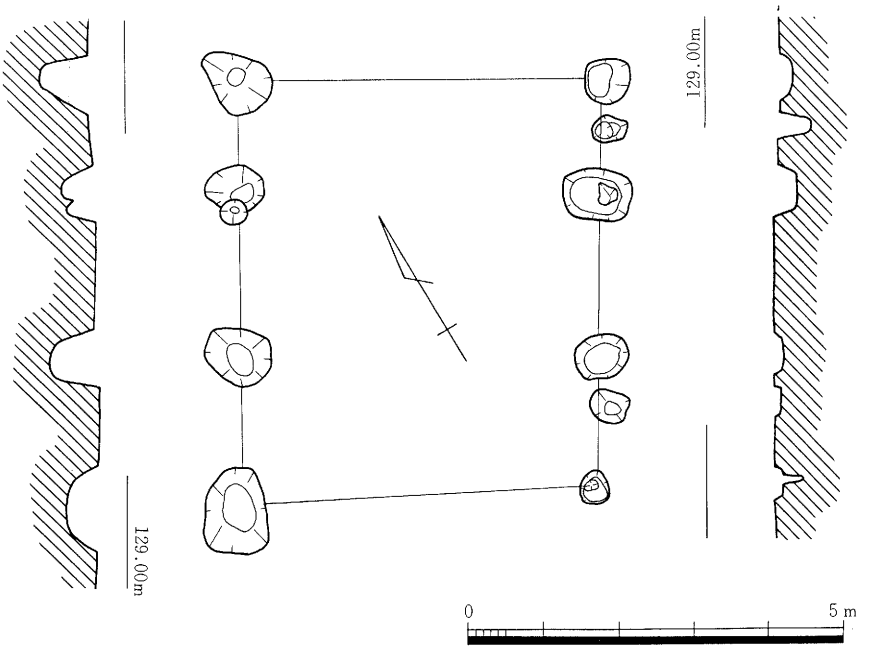
第７図　掘立柱建物Ⅱ　遺構実測図



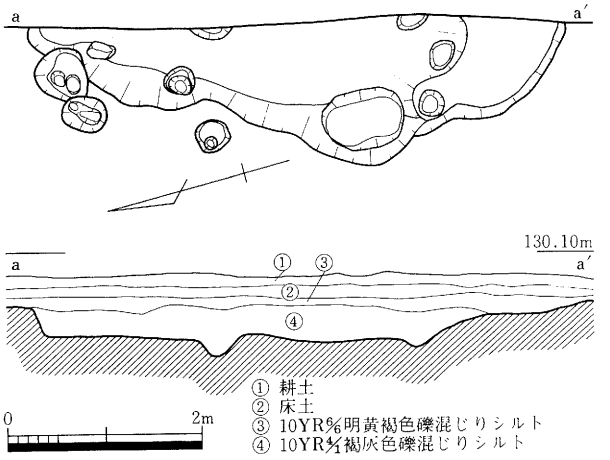
第８図　掘立柱建物Ⅱ　出土遺物実測図

＜掘立柱建物Ⅲ＞

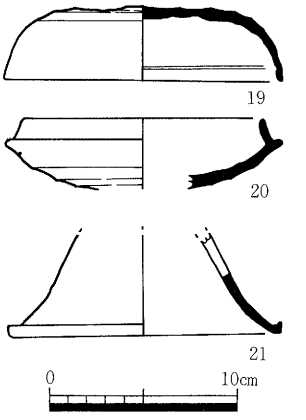
掘立柱建物Ⅰの北東側に接するように位置する。桁行５間(7.5m)×梁行間？(４m)、主軸方向N－66°－W。柱穴は径0.4～１m、深さ0.5～１m、埋土から須恵器・土師器片が出土している。遺物は実測可能なものは出土していない。



第９図　掘立柱建物Ⅲ　遺構実測図



第10図　土壙遺構実測図



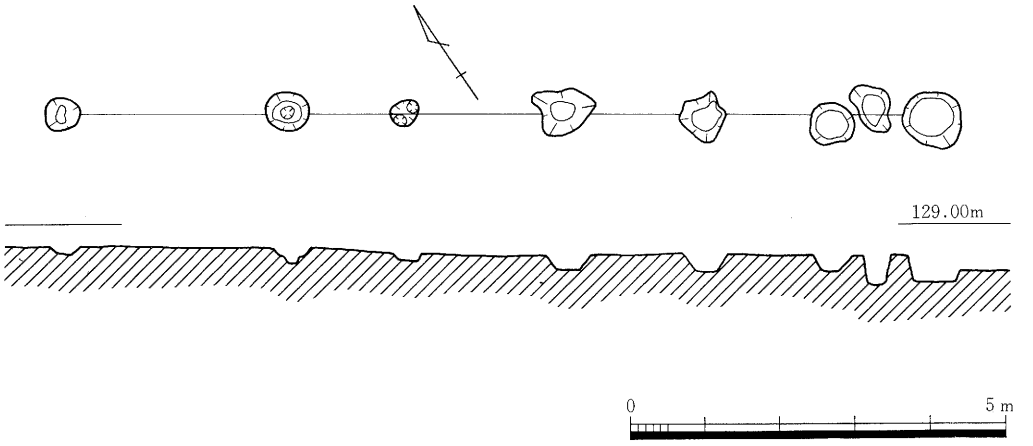
第11図　土壙遺物
実測図

＜土壙＞　掘立柱建物Ⅱの東側梁行に接して西側部分が検出された。平面形は主軸がやや東に振る長楕円形のようである。長径5.6ｍ、深さ0.3ｍ。

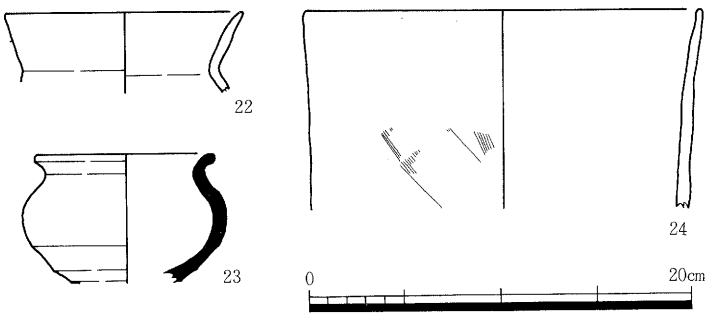
出土遺物で図示できたのは須恵器杯蓋（19）、杯身（20）、高杯脚部（21）である。

＜棚列＞　掘立柱建物Ⅰの桁行に平行して西南側２ｍを走る。柱間の間隔は一定ではない。柱穴の径は0.2ｍ～0.3ｍ。

遺物は出土していない。



第12図　棚列遺構実測図



第13図　ピット出土遺物実測図

遺物

本遺跡の出土遺物は古墳時代の土師器と須恵器で、いずれも古墳時代後期のものである。

＜土師器＞　竪穴住居から高杯(８)、甕(９)、鉢(10)、甑(11)、が出土している。

甕と甑はカマドからの出土で、二次焼成を受けており、煮沸に使用されていたようである。高杯は、底部と体部の境に稜を残す形態のもので、底部外面にヘラミガキがかすかに見られる。鉢は口径10.85cmの小型のもので、他の土師器に比べやや精製された胎土を持ち、焼成も良好である。

ピットから出土している甕（22)は、(９)と同様の底体部を有すると思われる。

＜須恵器＞　蓋杯(１～６・12・14)、高杯脚部(７・16～18・21)広口壺口縁部(13) 短頸壺(23)、脚付壺脚部 (15) が出土している。

蓋杯の蓋に稜はなく、口縁端部は内傾する段をなすもの(１・２・３)と自然におさめるもの(12・14)、内面に１条の沈線をめぐらすもの(19)がある。

身は立ち上がりがやや短く、端部は自然におさめるもの(4・5・6)である。また(1・19)の天井部内面には同心円状アテ具のスタンプが残る。陶邑編年によれば、いずれもⅡ－3に相当する。

高杯脚部は長方形または台形の透かしを2段に有するものが多いが、(21)のように1段だけの透かしを有するものもある。いずれも陶邑編年Ⅱ－3に相当する。

ピット1から出土している短頸壺(23)は口縁部が外反するもので、やはり陶邑編年Ⅱ－3に相当する。

遺物の詳細は別表の通りである。

4．まとめ

以上の結果、当遺跡の時期は須恵器から陶邑編年Ⅱ－3を中心とするものである。

遺構の特徴としては、掘立柱建物Ⅰ、Ⅲ、竪穴住居が主軸を同じとしている。そして、須恵器の型式差はあまり見られず、平面的な配置を見る限り、同時に存在していたと考えたほうが妥当と思われる。また、土壙も同時期と考えられる。掘立柱建物Ⅱは、掘立柱建物Ⅰのピットを切っており、出土須恵器も後出の傾向を示している。このような掘立柱建物と竪穴住居のセットは石川上流では初めてである。

この時期の遺構は、天見川の右岸の三日市遺跡からも検出されている。三日市遺跡の場合は土壙と竪穴住居であるが、須恵器の型式差では1～2型式後出するものである。

このような状況から見て、石川最深部に位置する当遺跡周辺部では、竪穴住居が6世紀末ごろまで営まれていたようである。この地域の竪穴住居から掘立柱建物への移行する重要な資料である。

長池窯跡群

1．位置と環境

調査場所は、南西から北東にのびる小山田丘陵の尾根上標高175ｍ付近に位置する。東側は石川の河川段丘面、西側はマサンダ池の位置する谷部となっている。赤峰丘陵を中心とする小山田地区の丘陵内には古代末から中世に及ぶ所謂小型窯状遺構が分布する長池窯跡群の地域である。今回の調査地の東側斜面では５基が検出されており現在７箇所17基が確認されている。

また丘陵の東側、石川の左岸河岸段丘上には弥生時代から中世に渡る複合遺跡の高向遺跡が所在し、また、中世の上原遺跡も位置する。更に、横穴式石室を有する塚穴古墳も位置している。

2．調査に至経過

当該地は、学校用地として開発されることになり、原因者からの事前協議があり、当該地が周知の遺跡長池窯跡群の範囲に含まれるため、調査が必要の旨回答した。結果、昭和62年７月１日に第１次調査について覚え書きを締結し、昭和62年７月23日から昭和62年７月29日まで第１次調査として範囲確認調査を実施した。結果、丘陵尾根部から遺構が確認され、昭和63年５月10日に第２次調査について覚え書きを締結し、昭和63年６月13日から昭和63年７月２日まで第２次調査として、遺構が確認された1,000㎡について全面調査を実施した。

3．遺構と遺物

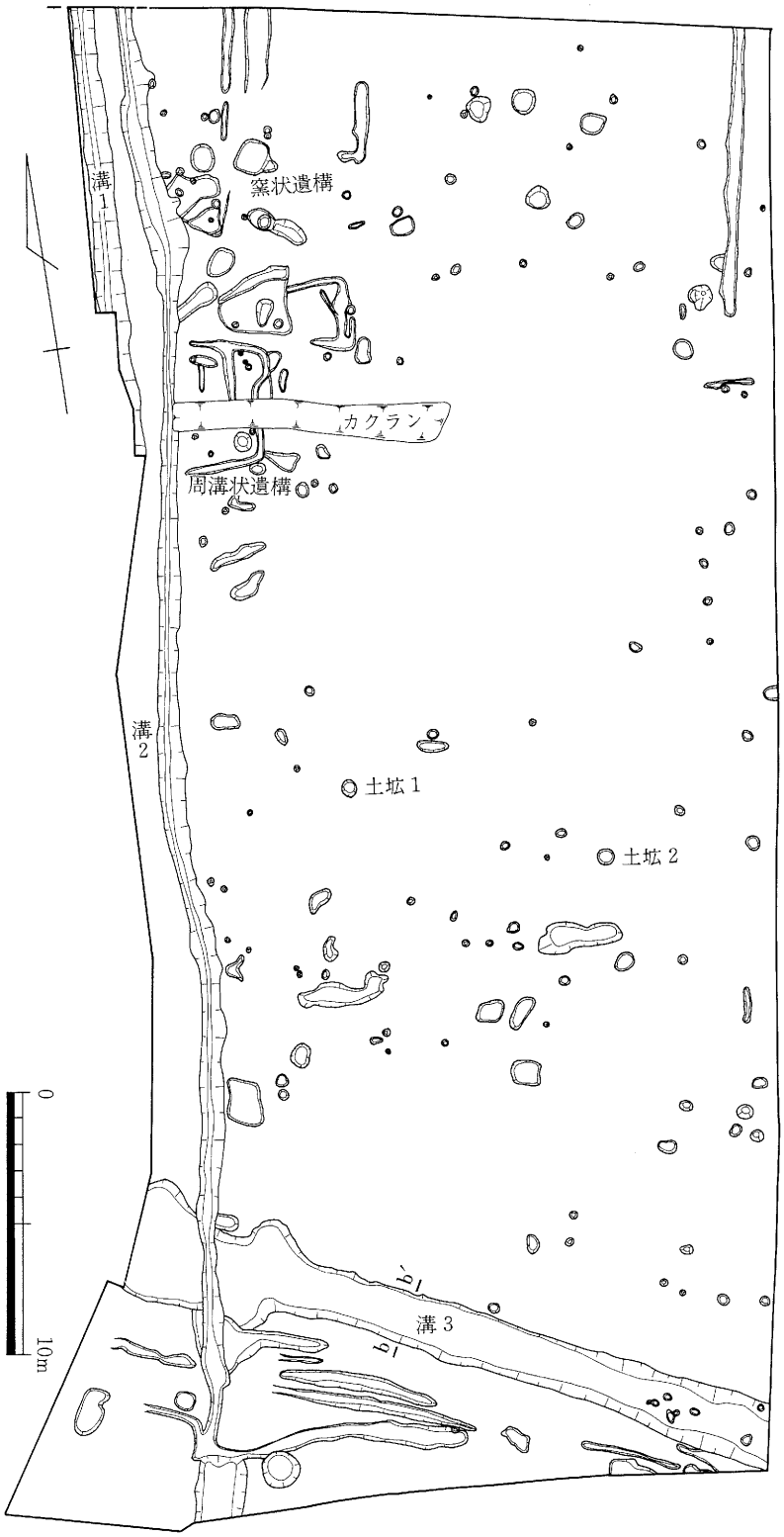
遺構

調査地区全域から溝、土壙、窯、竪穴住居、ピット（小穴）が検出された。

＜溝１＞　調査区の西端、尾根の等高線にそって、一部検出された。幅１ｍ、深さ0.5ｍ。

遺物は検出されなかった。

＜溝２＞　調査区の西端、尾根の等高線にそって、溝１の東側0.9ｍに平行に検出された。この溝は調査区の南端で底が上り終っている。幅１ｍ、深さ0.5



第14図　長池窯跡群遺構全体図

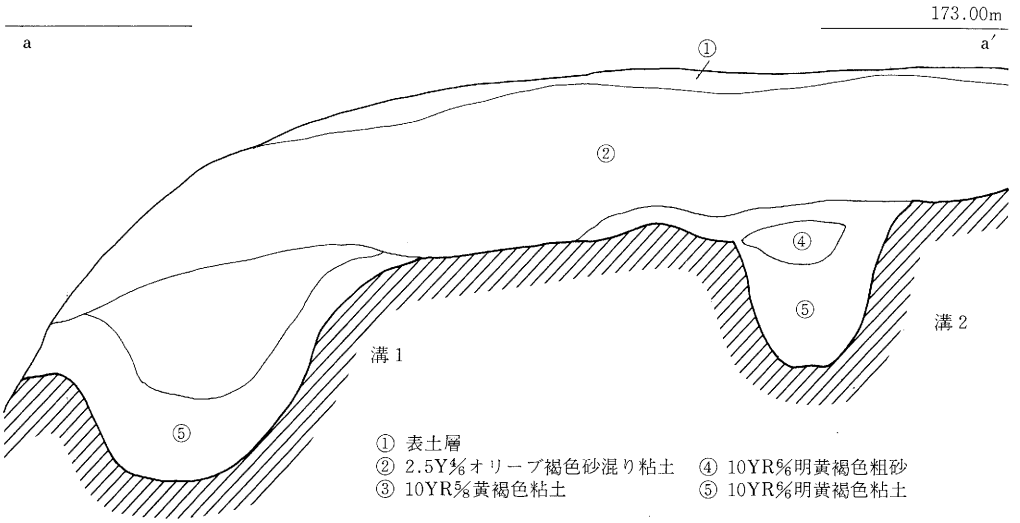
m。

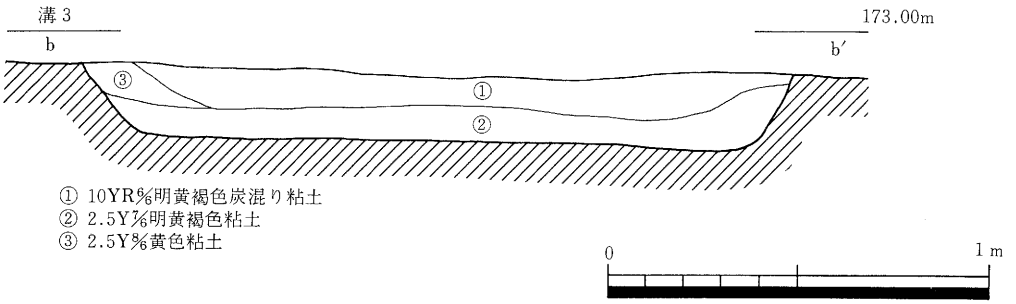
遺物は検出されなかった。

＜溝３＞　調査区の南端、尾根に直交に走り、溝２を切っている。幅２ｍ、深さ0.2ｍで、遺物はサヌカイト、瓦質の甕片が出土している。

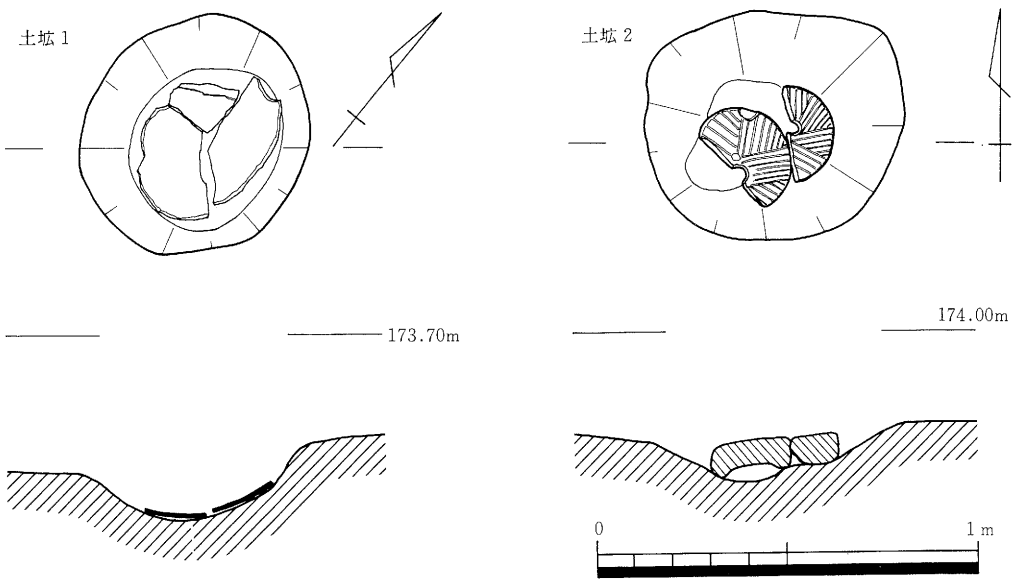
＜土壙１＞　調査区の中央に位置し、平面形は円形を呈する。径0.5ｍ、深さ0.15ｍ。土壙底部には、湊焼きの甕底部(27)が残存して出土している。

＜土壙２＞　調査区の中央に位置し、平面形は楕円形

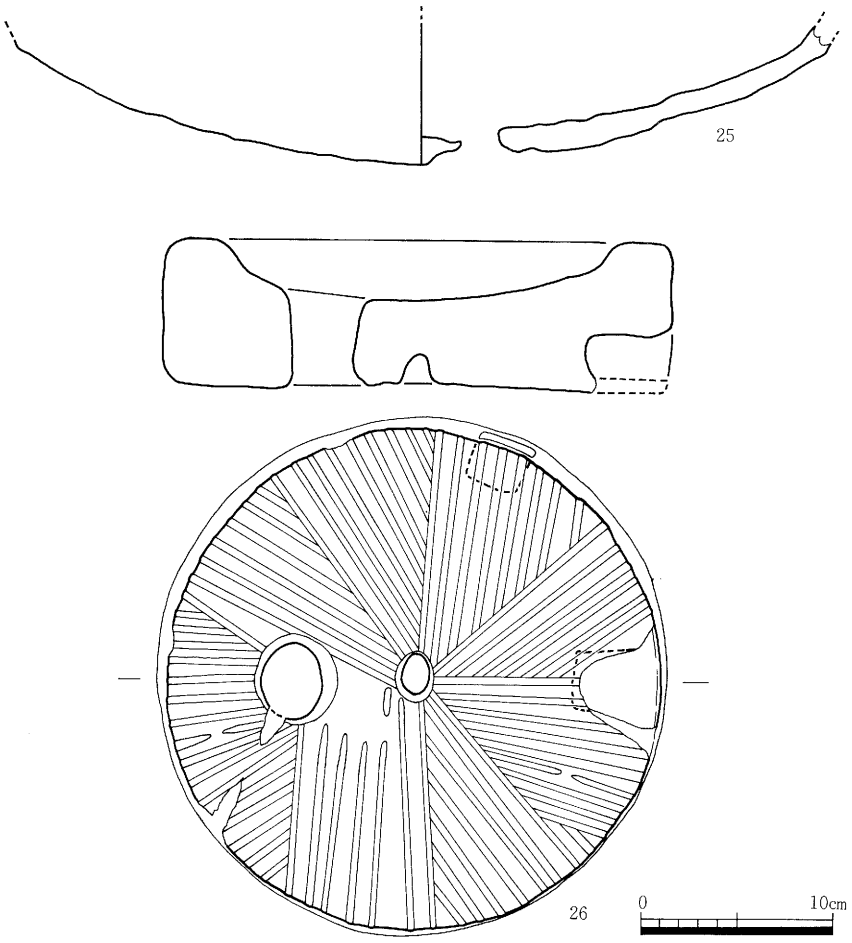




第15図　溝１、２、溝３　遺構実測図



第16図　土壙１、土壙２　遺構実測図



第17図　土壙１、土壙２　出土遺物実測図

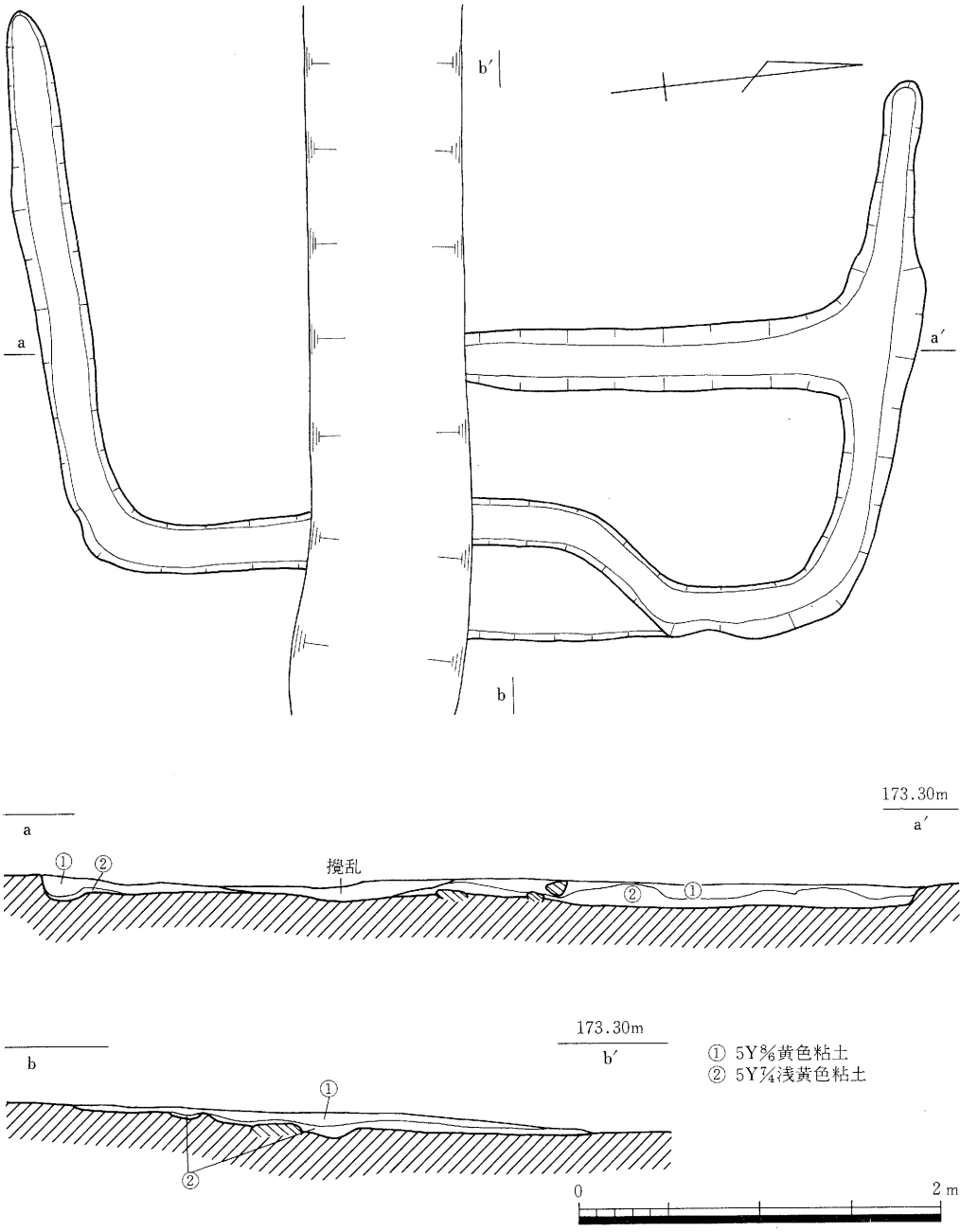
を呈する。長径0.6ｍ、短径0.5ｍ、深さ0.15m。

遺物は埋土中より、石臼の上部が２つに割れて出土した。(26)

＜周溝状遺構＞　平面的にはコの字状に巡るが、東側の一辺が変形している。規模は南北５ｍ、東西３ｍ、溝幅0.3m、深さ0.2m。周溝内からは土器片、自然石が出土している。石は台石か砥石として利用されたような痕跡がある。

遺物は鉄釘（27)、土師質皿（28)、片口鉢（29)、使用痕のある自然石（30～32）が出土している。

＜小型窯状遺構＞　調査区の南端から検出された。平面形は長方形を呈する。主軸方向Ｎ－45°－Ｗを示し、焼成口は南東に開口している。長辺1.2m、短辺1.1m、壁の残存高は0.2m。壁、床は熱を受け酸化し、幅0.1ｍで赤褐色酸化

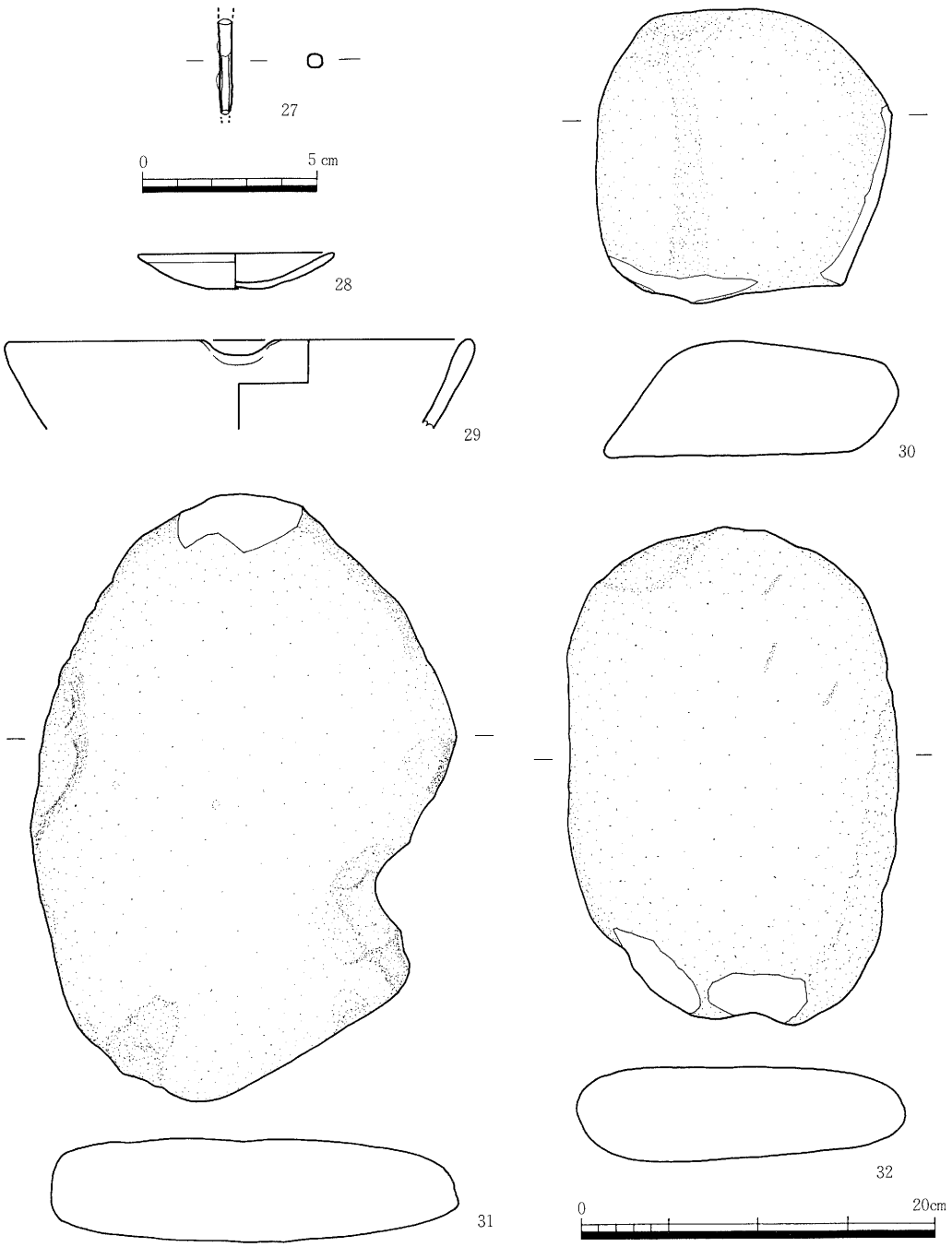


第18図　周溝状遺構実測図

層に変化している。

窯は形態から簡単な炭焼き窯である伏せ窯と考えられる。遺物は出土していない。

＜ピット＞　多数検出されたが、どれも建物などには復元できなかった。

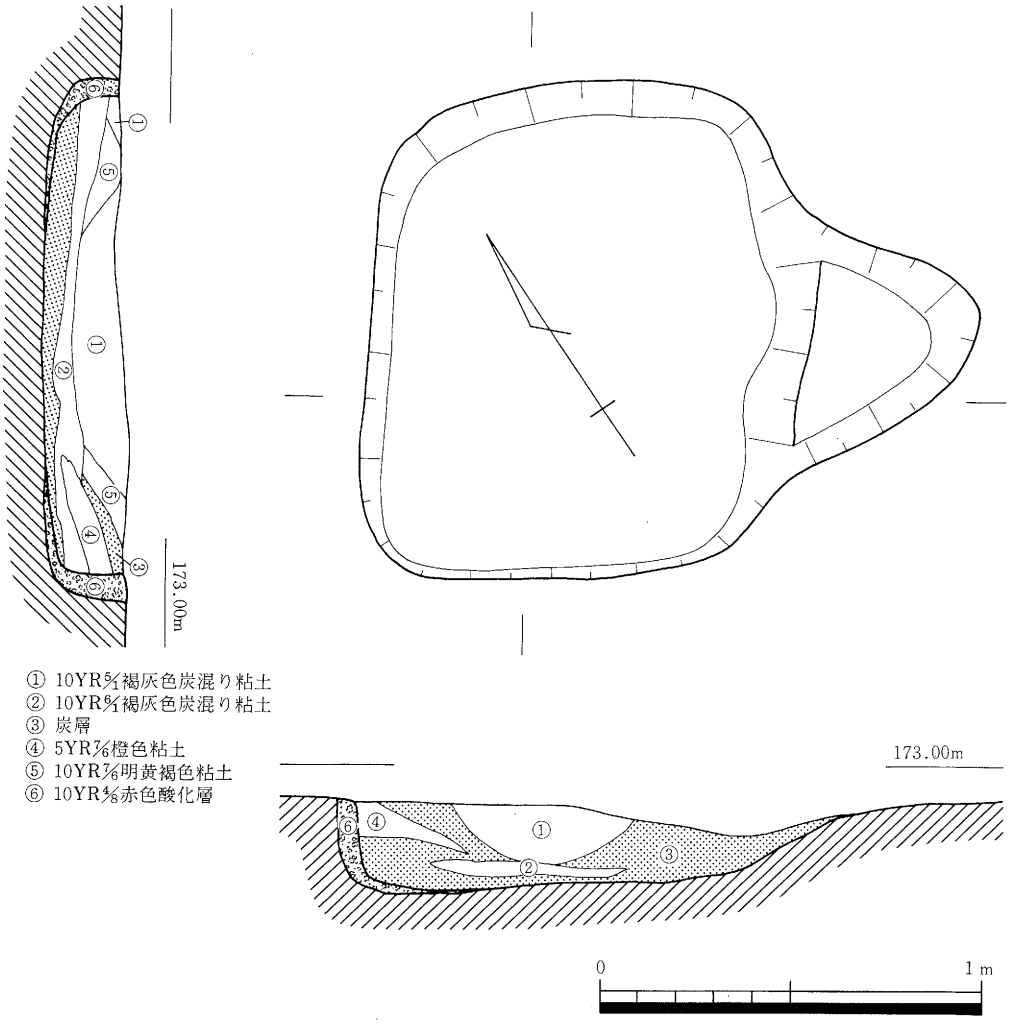


第19図　周溝状遺構出土遺物実測図

遺物

＜土師質土器＞　いずれも小片で、摩滅が著しく調整等は不明瞭であった。

小皿（28）はやや深く底部が凹底気味に窪むものである。



第20図　窯状遺構実測図

片口鉢（29）は丸みを持った小さな注口部を有するもので、内面には巻き上げ痕が残る。

甕底部（25）は丸みを持った平底で、中央部に径２～３cm程の穿孔がある。故意に穿たれたものかどうかは明らかでないが、焼成後に穿たれたものである。

＜石製品＞　周溝状遺構から作業台様の石（30～32）が出土している。いずれも砂岩の自然石で、数ヵ所に使用痕と思われる小さな窪みと摩滅部分が見られる。また火を受けた痕があり、(31）は炭化物が付着している。

粉挽き臼（26）は花崗岩製の上臼で、かなり使用されていたらしく下面の摩

滅は著しい。また不均等に摩滅しており全体に大きく傾いている。挽き木を打ち込む穴も2ヵ所に穿たれており、1つは摩滅により下面側が欠失している。目は一応8分画であるが、何度も打ち直されたらしく不揃いで、やはり非常に浅くなっている。側面の2箇所に火を受けた痕が見られる。

＜鉄製品＞　釘（27）が1点出土しているが、頭と先端部分を欠失している。断面は丸みを帯びた正方形である。

遺物の詳細は別表の通りである。

4．まとめ

以上の結果をまとめると以下の通りである。

1．溝1・2・3は開削されている標高、形状から考えて、灌漑用の水路と考えるのは不自然であり、あるいは城砦関係の遺構の可能性がある。

2．窯状遺構は、従来、長池窯跡群で検出された炭焼き窯と考えられている小型窯状遺構に比べ、構造が単純な伏せ窯であった。この遺構の時期は不明であるが、伏せ窯の検出は初めてであり、今後の市内の窯状遺構を考える上で重要な事例となる。

第２表　加塩遺跡出土遺物観察表

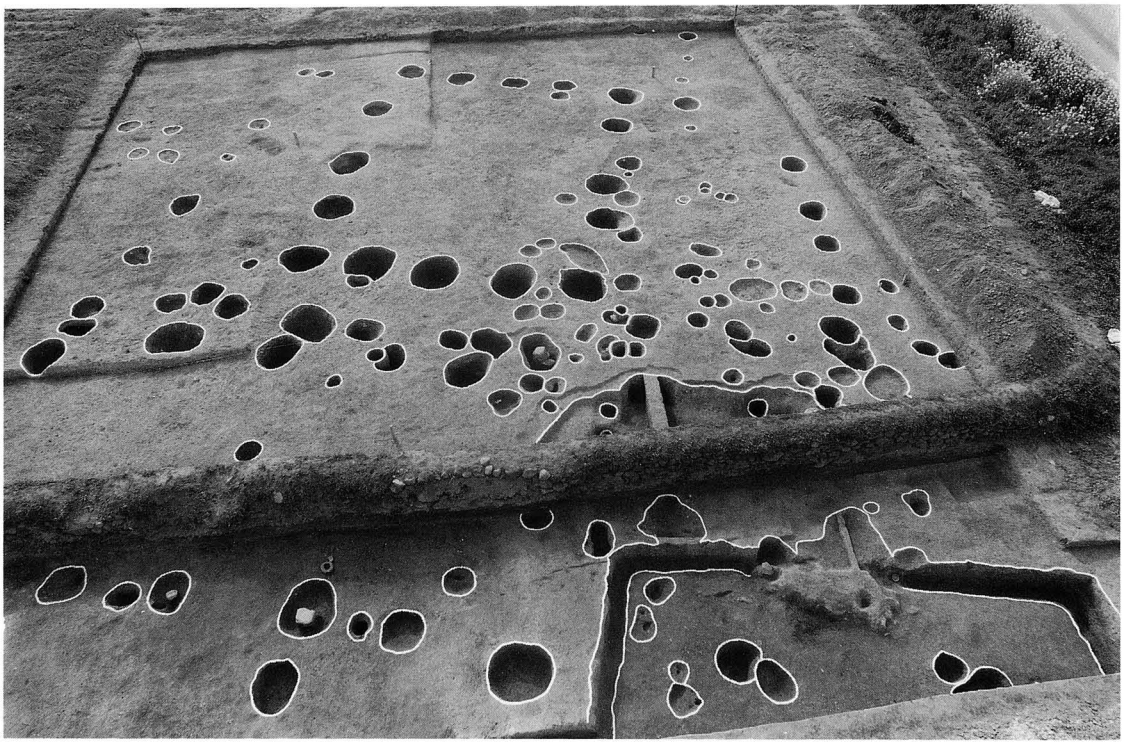
挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	影響・手法の特徴	備考
4－1	竪穴住居	須恵器	蓋杯（蓋）	口径 13.4cm 器高 4.5cm	密	堅緻	外：青灰 内：明青灰 断：紫灰	口縁部は内傾する段をなす。天井部内面上部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。天井部内面中央に同心円状アテ具痕を残す。ロクロ回転右。	
4－2	竪穴住居	須恵器	蓋杯（蓋）	口径 14.2cm 器高 3.9cm	密	堅緻	灰白	口縁部は内傾する段をなす。天井部内面上部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転左。	
4－3	竪穴住居（竈内）	須恵器	蓋杯（蓋）	口径 14.6cm 器高 4.8cm	密	堅緻	外：明青灰～青灰 内：紫灰 断：明紫灰	口縁端部は内傾する段をなす。天井部外面上部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。天井部内面中央は後不定方向のナデを施す。天井部外面にヘラ記号有する。ロクロ回転右。	
4－4	竪穴住居	須恵器	蓋杯（身）	口径 12.4cm 受部径 14.8cm 残存高 3.85cm	密	やや軟	外：灰白～淡黄 内：淡橙 断：橙～にぶい橙	口縁端部は丸い。底部外面回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転右。	
4－5	竪穴住居（竈内）	須恵器	蓋杯（身）	口径 12.4cm 受部径 14.9cm 残存高 3.85cm	密	堅緻	明青灰～青灰	口縁端部は鋭い。底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転右。	受部に異個体付着。
4－6	竪穴住居（竈内）	須恵器	蓋杯（身）	口径 12.55cm 受部径 15.0cm 残存高 4.5cm	密	堅緻	外：灰、明青灰 内断：灰白	口縁端部は鋭い。底部外面ヘラケズリ。他は回転ナデ。底部外面にヘラ記号を有する。ロクロ回転右。	
4－7	竪穴住居	須恵器	高杯（脚部）	脚径 14.6cm 残存高 2.8cm	密	堅緻	外断：灰、灰白 内：明青灰	下方に浅い沈線を１条巡らし、端部は内傾する面をなす。残存部は回転ナデ。	
4－8	竪穴住居	土師器	高杯（杯部）	口径 18.8cm 残存高 5.8cm	密	やや軟	外：橙 内：浅黄橙 断：明赤褐	底部と口縁部の境は段をなす。口縁端部は外反し鋭い。口縁部は２～３段の巻き上げによるもので、痕跡が残る。	
4－9	竪穴住居（竈内）	土師器	甕（底部）	残存高 5.8cm	密	堅緻	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙 断：褐灰	体部から底部外面ハケ目。内面底部は指オサエ、体部はヘラケズリ。	二次焼成を受けている。外面に煤付着。底部は使用によりハケ目が摩耗している。
4－10	竪穴住居（竈内）	土師器	鉢	口径 10.85cm 体部最大径10.1cm 器高 5.7cm	密	堅緻	外：淡黄 内：浅黄橙	底部外面指オサエ、内面不定方向のナデ。他はヨコナデ。内外面に巻き上げの痕を残す。	
4－11	竪穴住居（竈内）	土師器	甑	口径 26.0cm 底部 13.2cm 残存高 29.8cm	密	堅緻	にぶい黄橙～暗褐	底部には穿孔があるが形態、個数は不明。口縁部内外面ともヨコナデ。体部内面上部は指オサエ、他はヘラケズリ。体部外面はハケ目。底部は内外面ともナデ。	
6－12	掘立柱建物Ⅰ（pit4）	須恵器	蓋杯（蓋）	口径 13.2cm 残存高 3.6cm	やや粗	やや軟	灰色	口縁端部は丸い。天井部外面上部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	
6－13	掘立柱建物Ⅰ（pit5）	須恵器	広口壺（口縁部）	口径 19.6cm 残存高 4.3cm	密	堅緻	外断：青灰 内：明青灰	口縁端部はやや肥厚し、外端面は凹面をなす。頸部はカキ目。他の残存部は回転ナデ。	
8－14	掘立柱建物Ⅱ（pit6）	須恵器	蓋杯（蓋）	口径 16.95cm 残存高 4.0cm	密	やや軟	外：明青灰 内断：灰白	口縁端部は丸い。天井部外面上部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転右。	
8－15	掘立柱建物Ⅱ（pit6）	須恵器	脚付壺（脚部）	脚径 14.6cm 残存高 3.1cm	密	堅緻	外内：灰、灰白 断：灰白	残存部は回転ナデ。	
8－16	掘立柱建物Ⅱ（pit6）	須恵器	高杯（脚部）	脚径 16.95cm 残存高 8.4cm	密	堅緻	外：灰 内：明青灰 断：灰赤	長方形の透かしを３方向に有し、その下方に１条の沈線を巡らす。残存部は回転ナデ。	
8－17	掘立柱建物Ⅱ（pit7）	須恵器	高杯（脚部）	残存高 10.0cm	密	堅緻	外内：灰～明青灰 断：明赤灰	長方形の透かしを３方向に有し、その下方に２条の沈線を巡らす。残存部は回転ナデ。	

挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	影響・手法の特徴	備考
8－18	掘立柱建物Ⅰ（pit7）	須恵器	高杯（脚部）	脚径 16.8cm 残存高 6.8cm	密	堅緻	外：灰 内：灰白～にぶい黄橙　断：灰白	台形の透かしを3方向に有し、その下方に1条の沈線を巡らす。残存部は回転ナデ。	
0－19	土壙	須恵器	蓋杯（蓋）	口径 14.8cm 器高 4.0cm	密	堅緻	外：灰白、白 内断：明青灰	口縁部は丸く、内面に1条の沈線を巡らす。天井部外面回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。天井部内面中央に同心円状アテ具痕が残る。ロクロ回転右。	
0－20	土壙	須恵器	蓋杯（身）	口径 12.6cm 受部径 14.8cm 残存高 3.75cm	密	やや軟	外：明オリーブ灰 内断：灰白	口縁部は丸い。底体部外面下部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ回転右。	
0－21	土壙	須恵器	高杯（脚部）	脚径 14.4cm 残存高 5.4cm	密	堅緻	灰白	透かしを有するが形態、個数は復元できない。残存部は回転ナデ。	
3－22	pit3	土師器	甕（口縁部）	口径 12.6cm 残存高 4.4cm	密	やや軟	外：淡橙 内：にぶい橙 断：浅黄橙	体部内面はヘラケズリ。他の残存部はナデ。	
3－23	pit1	須恵器	短頸壺	口径 9.4cm 体部最大径11.0cm 残存高 6.9cm	密	堅緻	外：明緑灰 内断：明青灰	口縁端部は丸い。体部外面下位より底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	
3－24	pit2	土師器	甑	口径 20.8cm 残存高 10.7cm	密	やや軟	外内：橙 断：浅黄橙	体部から口縁部はほぼ垂直に伸び、端部は丸い。口縁部外面ヨコナデ、体部外面はハケ目。	小片。内面は摩耗著しい。

第3表　長池窯跡（千代田学園用地）出土遺物観察表

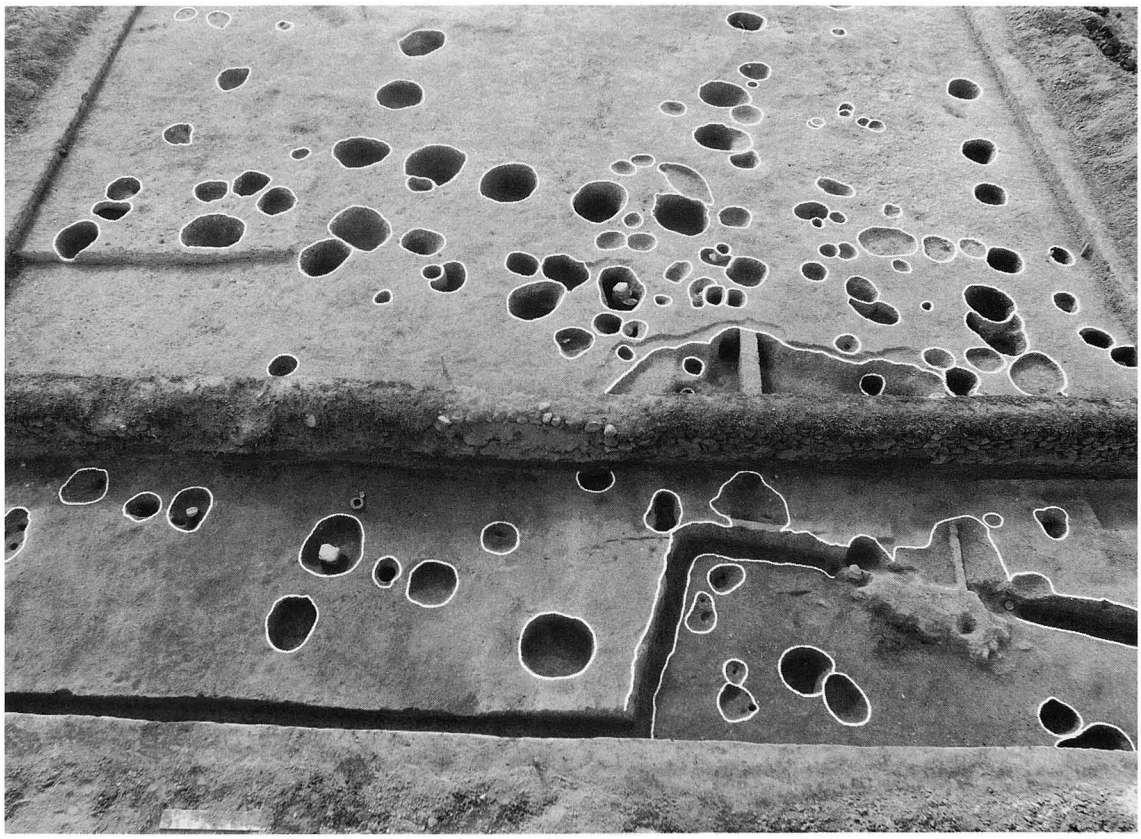
挿図番号	出土遺構	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	影響・手法の特徴	備考
17－25	土壙 1	土師質土器	甕（底部）	残存高 7.7cm	密	堅緻	外：浅黄橙、橙 内：黄橙、灰白 断：黄橙、橙	中央部に径1～2cmの不定形の穿孔を有する。内面は掌による圧痕が残る。	
17－26	土壙 2	石製品	臼	平均径 27.0cm 器高6.3～9.3cm	花崗岩	—	—	上面のくぼみの深さ2.6cm。目は8分画であるらしいが均等ではない。挽ぎ木を打ち込む穴は打ち直しで2箇所に穿たれている。	側面2箇所に火を受けた痕あり。
19－27	周構状遺構	金属製品	釘	残存長 2.75cm	鉄	—	—	頭部と先端部は欠損。断面は隅の丸い正方形を呈する。	
19－28	周構状遺構	土師質土器	小皿	口径 11.0cm 器高 2.0cm	密	やや軟	外：浅黄橙 内：浅黄橙、灰白 断：淡赤橙	口縁部は丸い。底部はやや凹底気味である。	小片。摩滅著しい。
19－29	周構状遺構	土師質土器	片口鉢	口径 26.5cm 残存高 5.0cm	粗	やや軟	外：褐灰 内：褐灰、明黄褐 断：橙	口縁部はやや肥厚し丸い。内面に巻き上げ痕が残る。	小片。摩滅著しい。
19－30	周構状遺構	石製品	作業台（砥石？）	長 18.9cm 幅 16.5cm 厚 6.4cm	砂岩	—	—	使用痕と思われる摩滅部分がある。	火を受けた痕あり。
19－31	周構状遺構	石製品	作業台（砥石？）	長 34.3cm 幅 23.7cm 厚 5.9cm	砂岩	—	—	数ヶ所に使用痕と思われる窪みと摩滅部分がある。	火を受けた痕あり。炭化物付着。
19－32	周構状遺構	石製品	作業台（砥石？）	長 28.2cm 幅 18.9cm 厚 5.5cm	砂岩	—	—	数ヶ所に使用痕と思われる窪みと摩滅部分が見られる	火を受けた痕あり。

図　　版

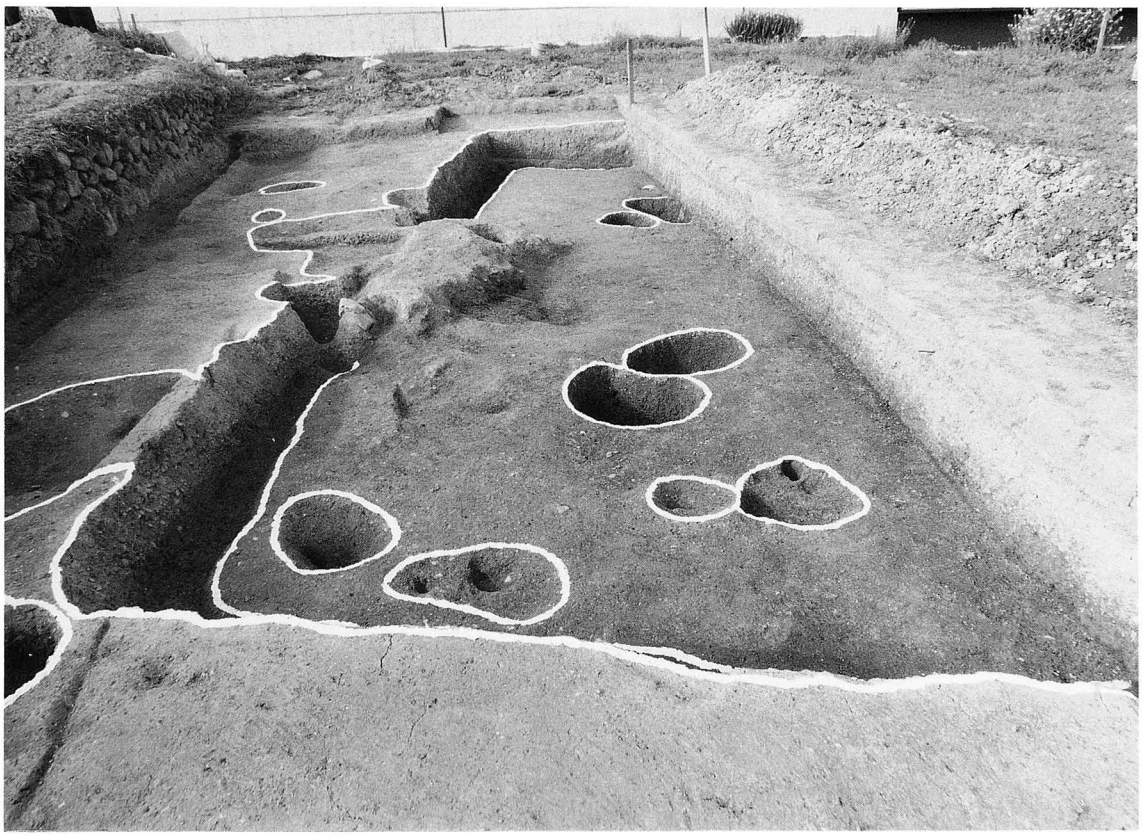


遺跡全景（東から）

掘立柱建物Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ全景（西から）



掘立柱建物Ⅱ・Ⅲ、土坑、竪穴住居全景（東から）



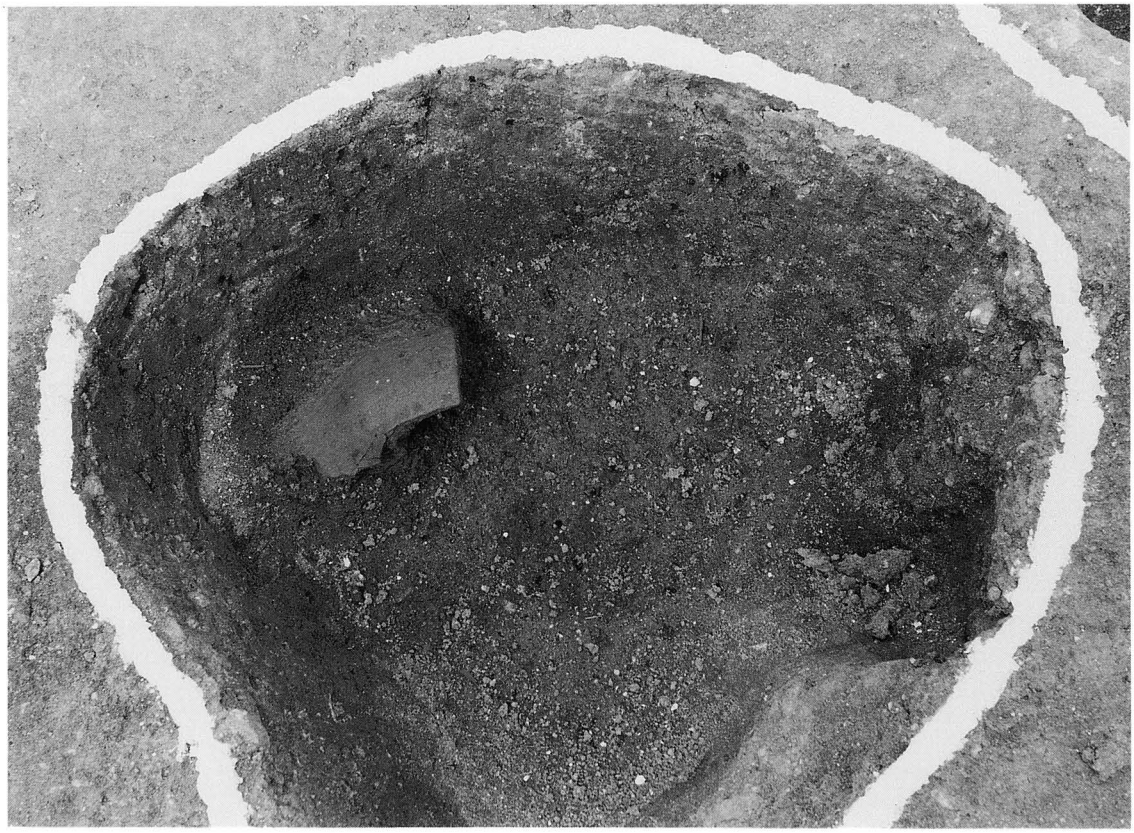
竪穴住居全景（南から）

竪穴住居竈状遺構

竈内遺物出土状況

住居内土器出土状況

土坑全景（南から）



柱穴内遺物出土状況

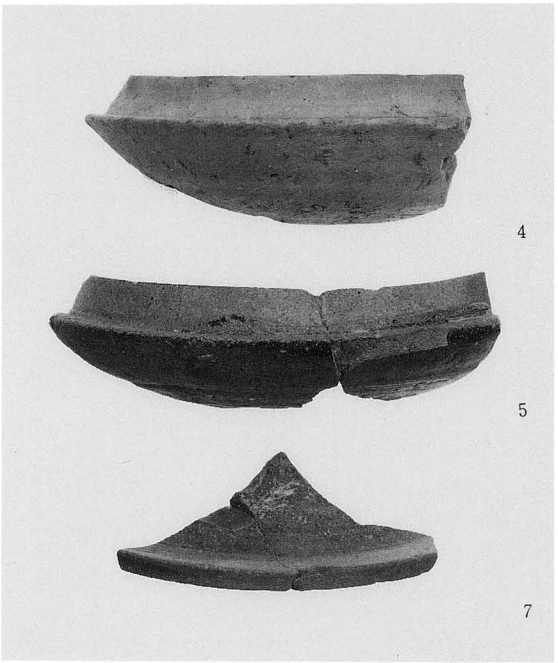
P 3 遺物出土状況

1

3

2

6

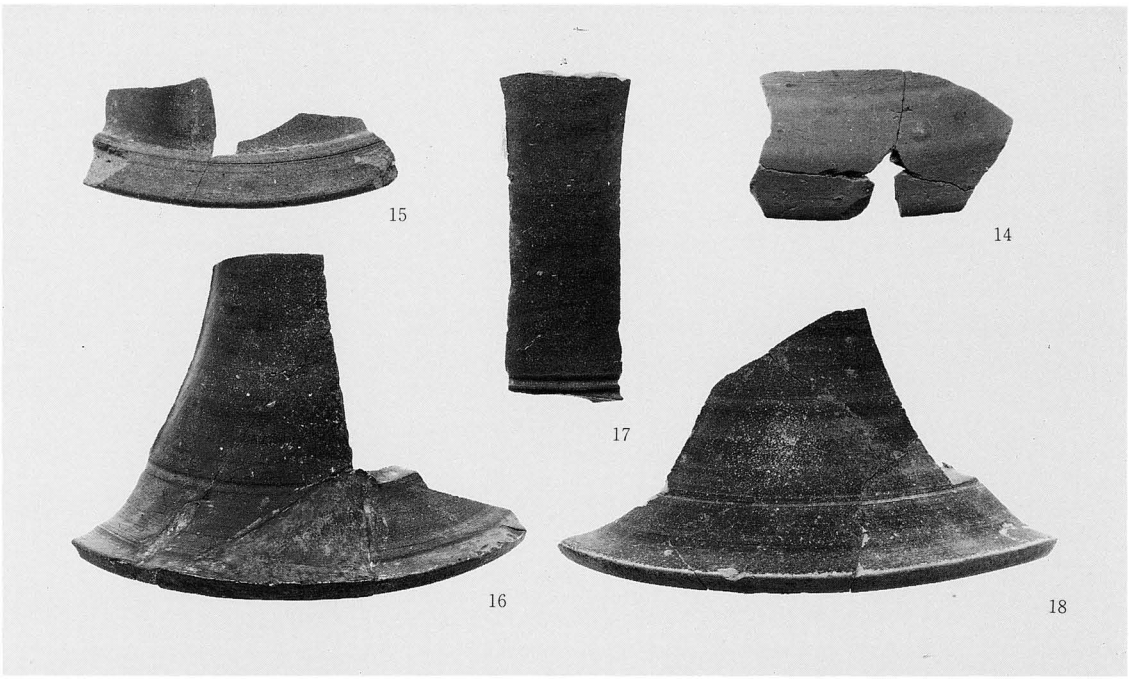

4
5
7

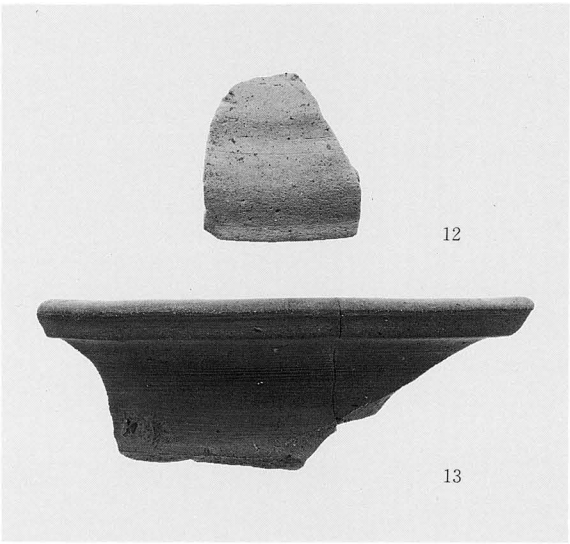
8

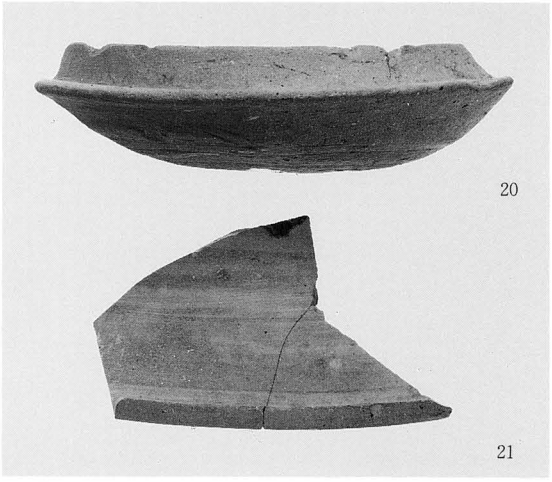
11

10

竪穴住居（1～11）







掘立柱建物Ⅰ（12、13）掘立柱建物Ⅱ（14～18）土坑（19～21）Ｐ１（23）Ｐ３（22）

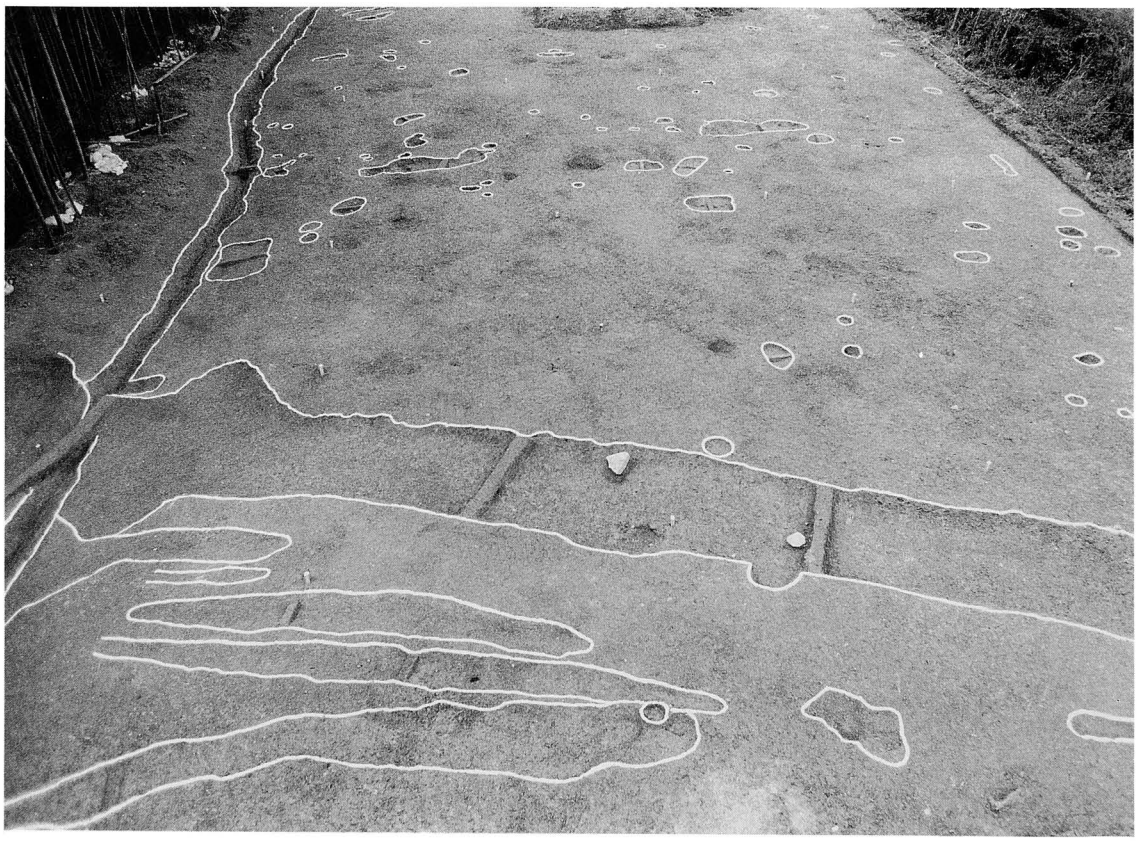
調査前全景

作業風景

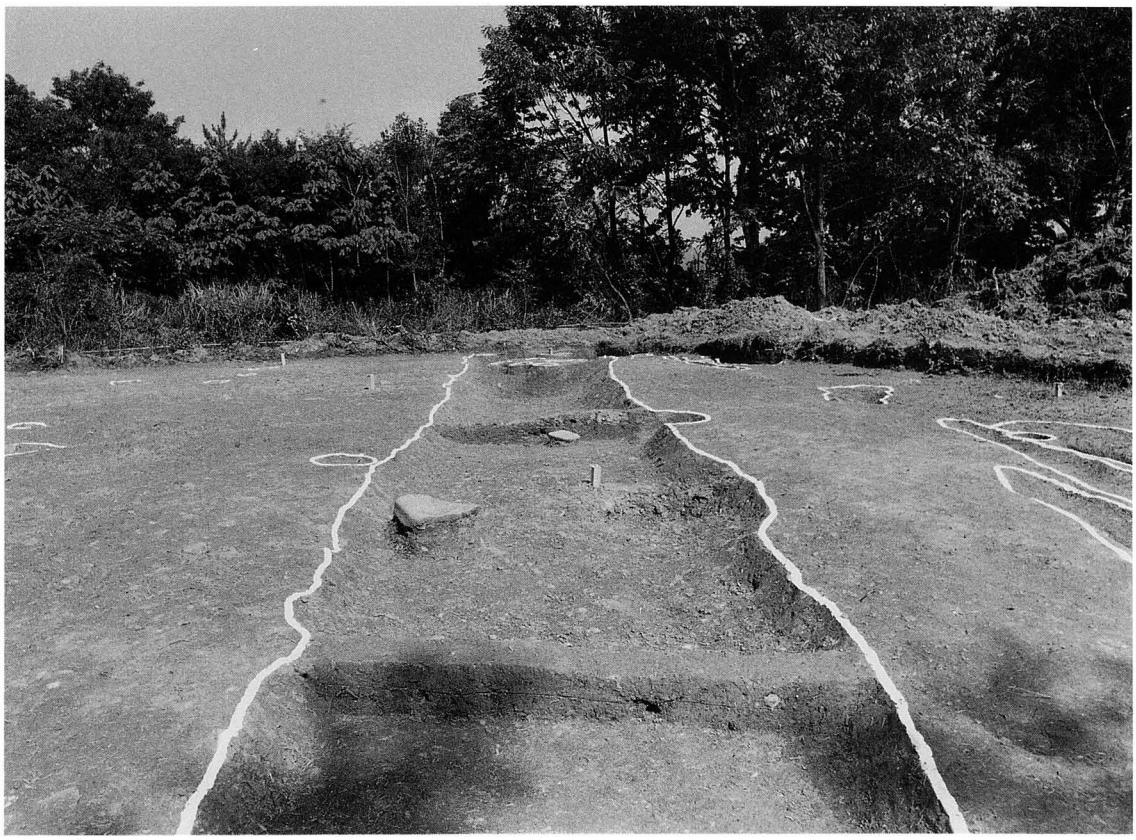
遺跡全景（南から）

遺跡全景（北から）

溝１・２全景（北から）



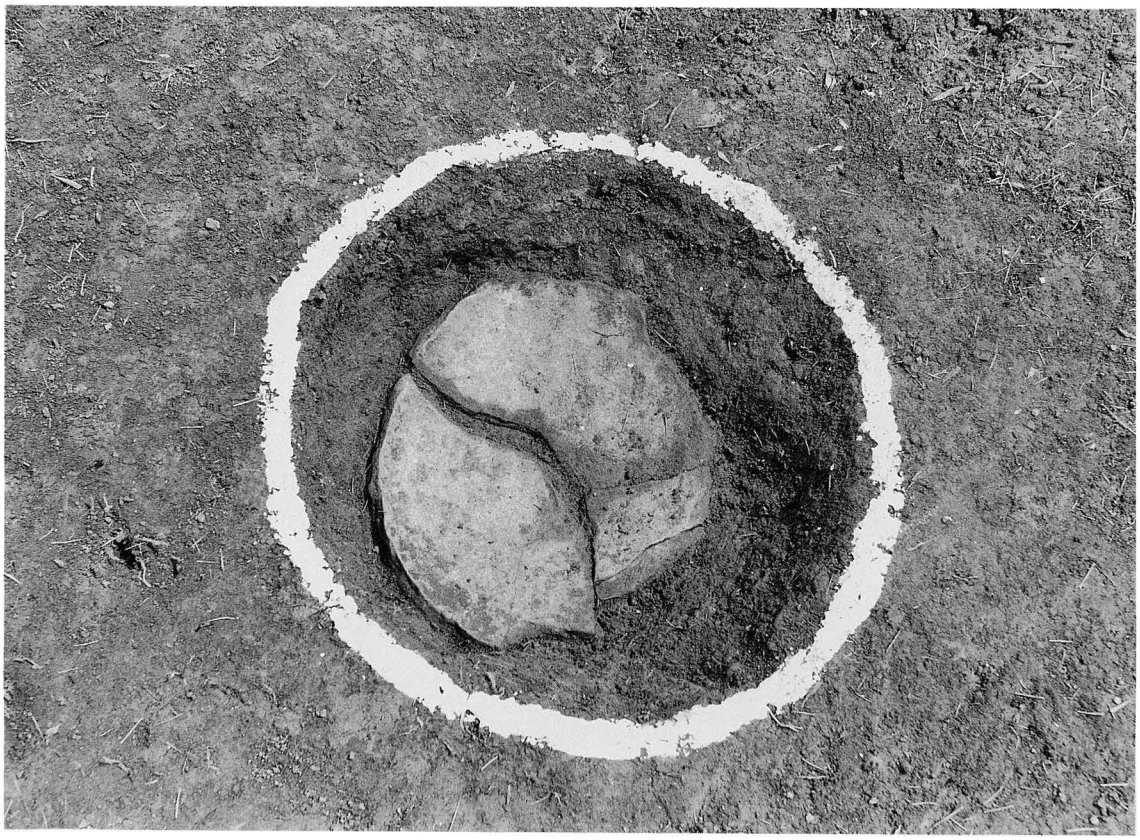
溝３全景（南から）



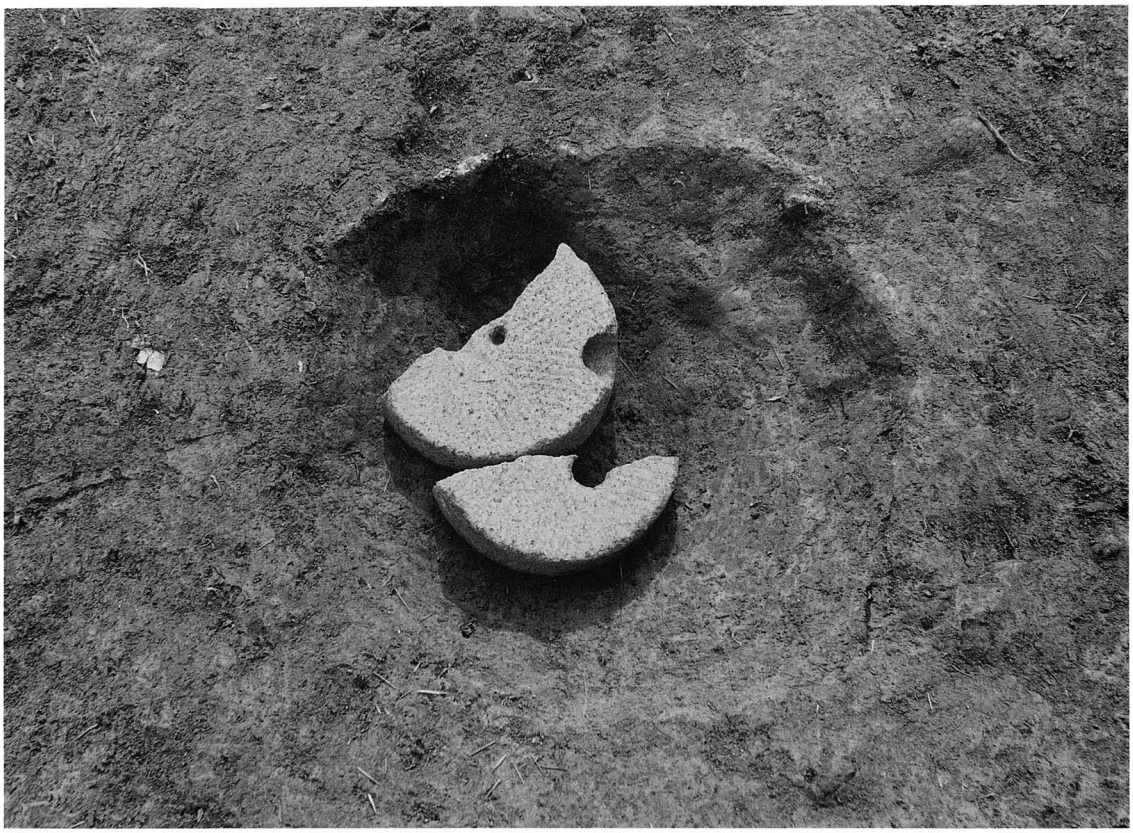
溝3（西から）

周溝状遺構全景（北から）

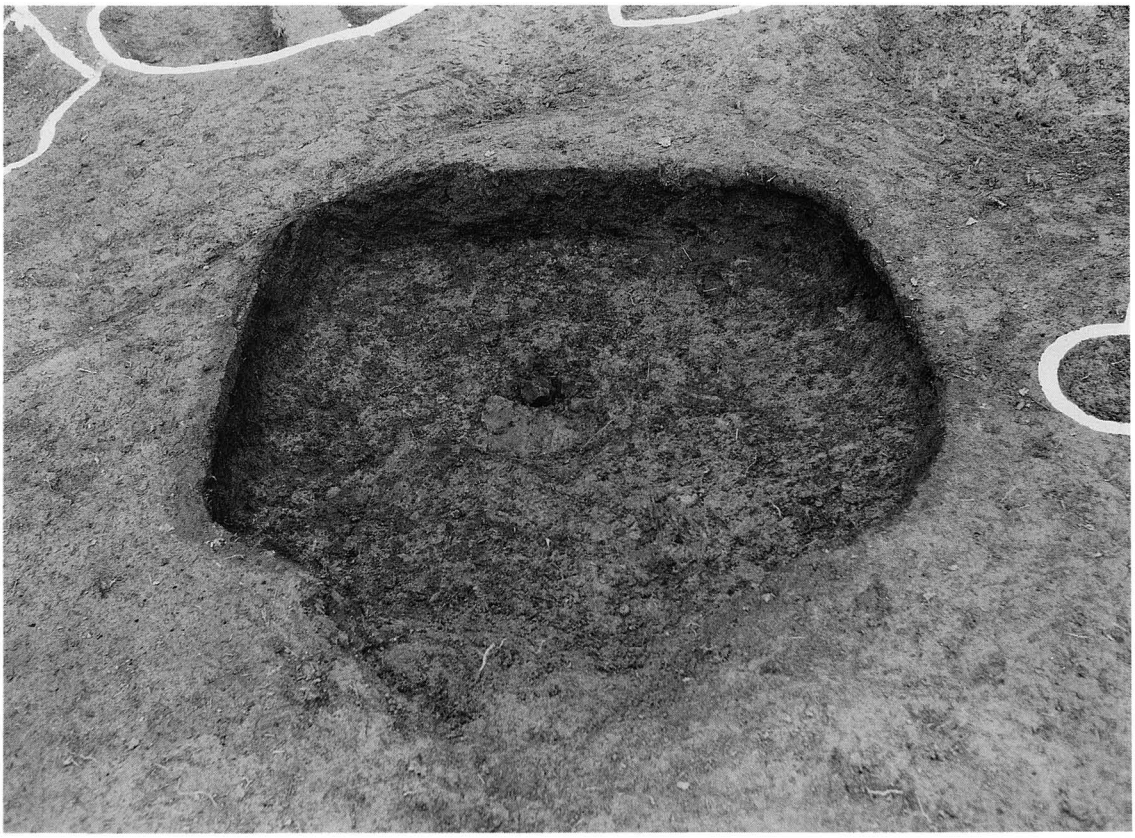
周溝状遺構土器出土状況



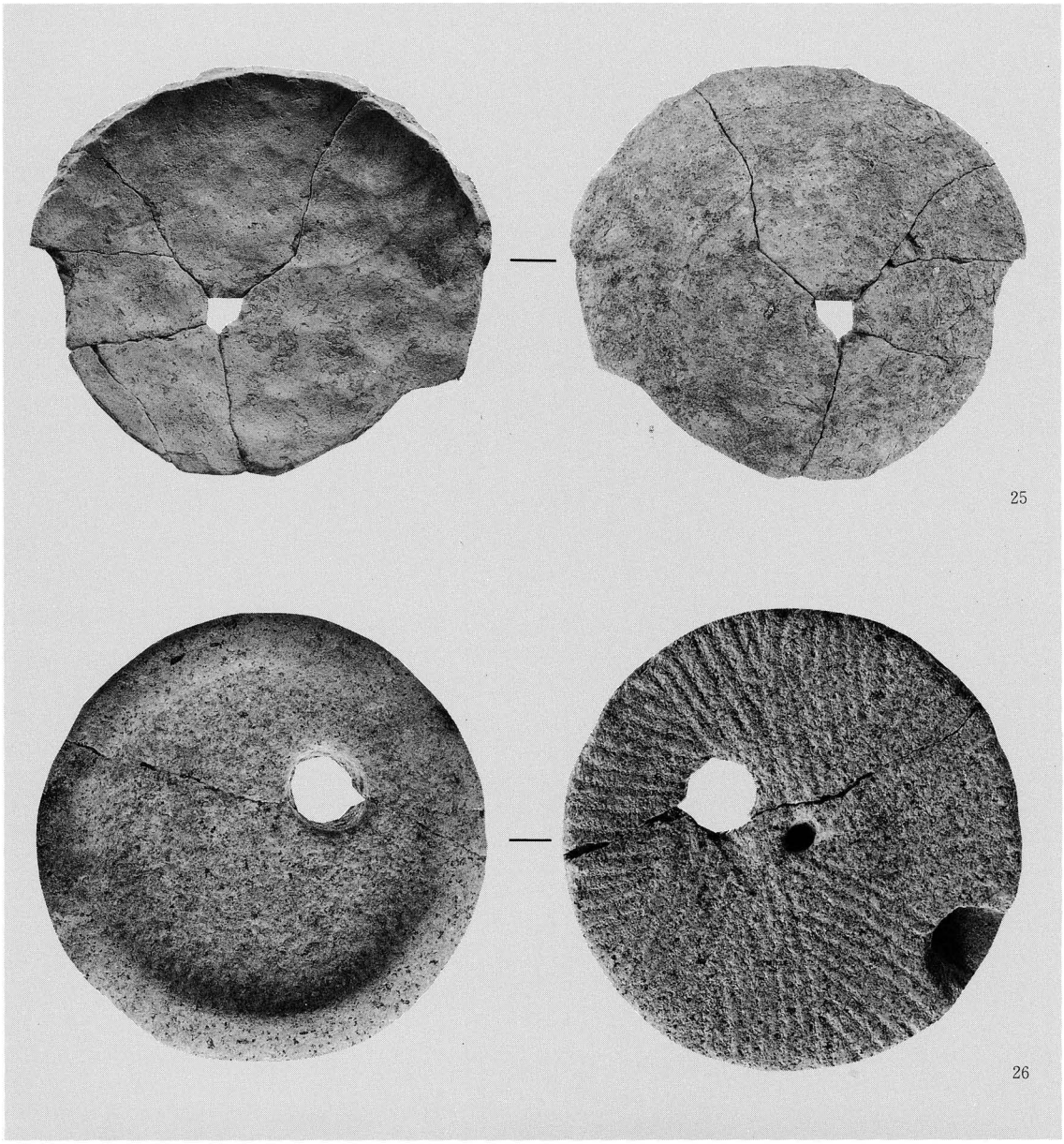
土坑１全景（北から）



土坑２全景（東から）

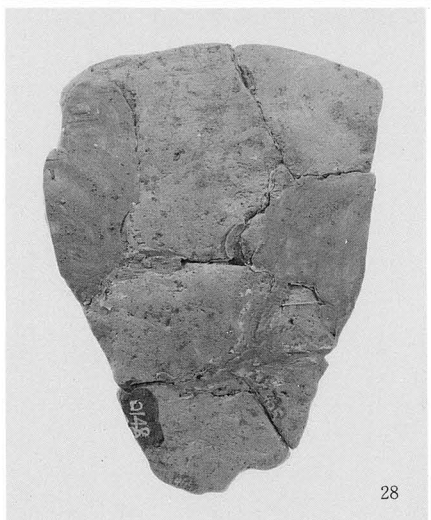


窯状遺構全景（東から）

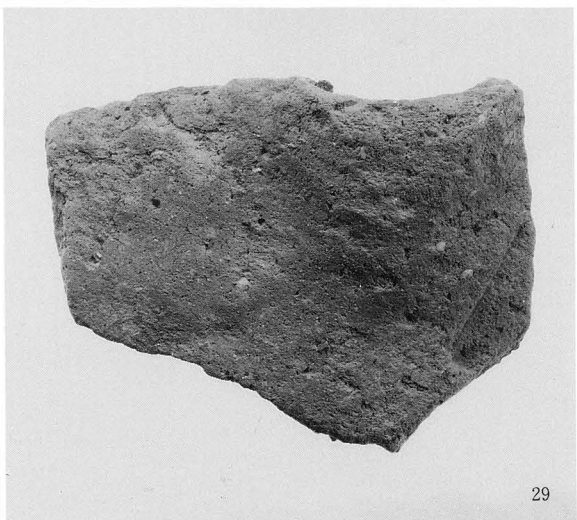


25

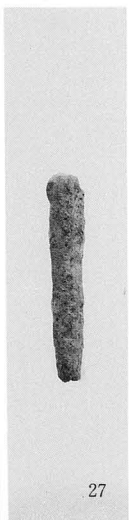
26



28

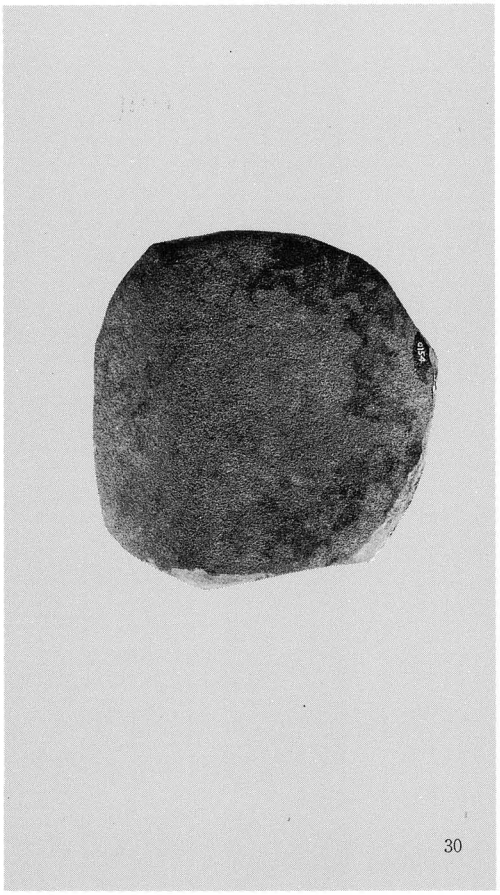


29

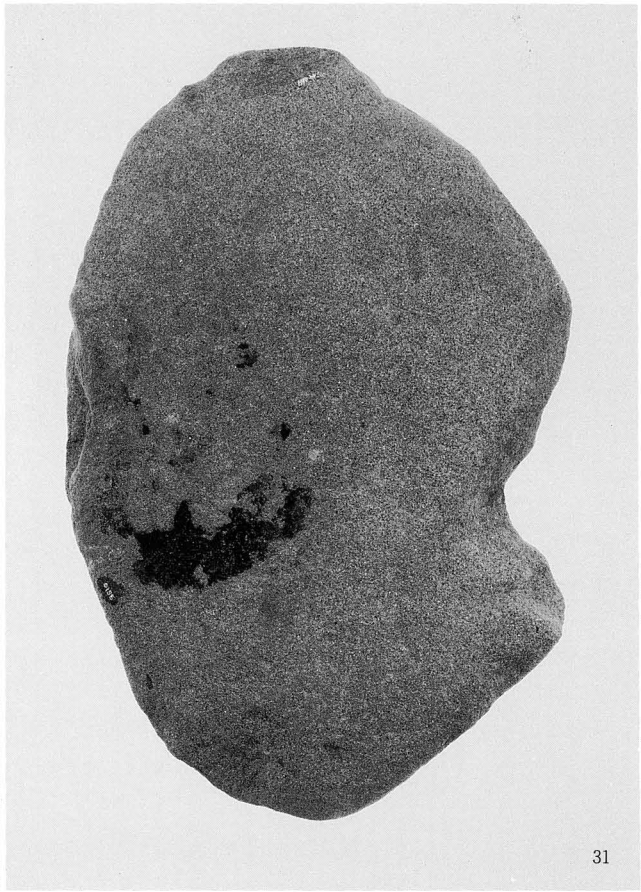


27

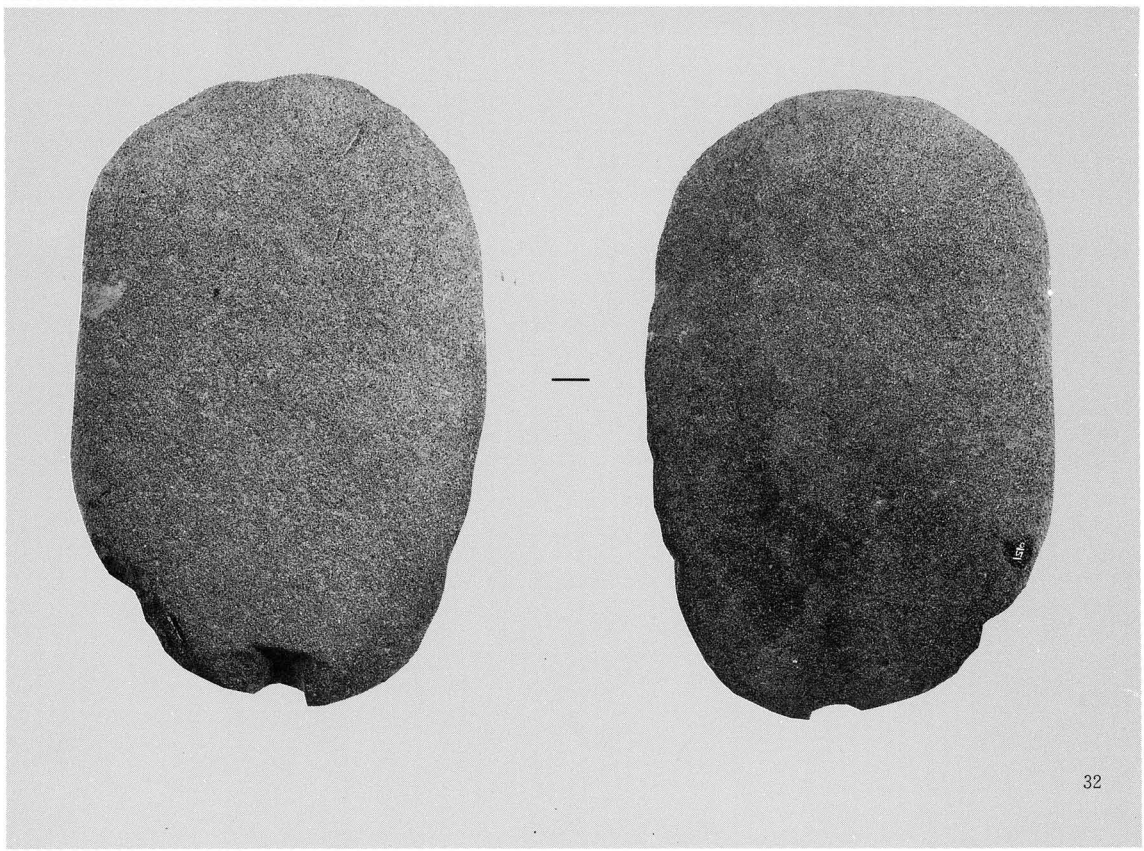
土坑 1 (25) 土坑 2 (26) 周溝状遺構 (27～29)



30



31



32

周溝状遺構（30～32）

河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

1989年3月

発行　河内長野市教育委員会

印刷　株式会社 中島弘文堂印刷所